

霊界からの大予言

かくて農耕国家となる

古代真理集

古宮賢一 著

霊界からの大予言

目次

はじめに

第一章 屋久島

第二章 月の旅路に

第三章 癒えゆく夢へ

本書に関する注意事項及び読者へのあとがき

2

3

59

74

80

はじめに

日本は神の国であり、勾玉となる純粹な国であります。

このことを証明するために文面を連ねました。

断片的な真理の集合ではありませんが、直感的に理解の方向を悟ってください。

何とか清らかな日本にもどってほしい。

この願いが、どっか届くように祈ります。

古宮賢一

1999年4月

第一章

屋久島

企業社会の到来の中で

今世紀、人類の歴史は大きく進んだ。アメリカの開拓と時期をともにして、石油を大量消費する今日の自動車社会や大衆消費型社会、企業社会が幕をきった。

世界大戦の時に発明された軍事技術は、戦後、爆発的に発明品の数々を誕生させ、現代の会社システムの基礎である様々な手法を誕生させた。

それらは、一部の未開地域、発展途上国や僻地的地域を除いて、瞬く間に新しい文明の波としておしよせた。他国に後れをとるまいと、日本も今まで持っていた原理、価値観を捨てて、それに挑み、現代にいたった。

瞬く間に、国に古来からあつた意識を変貌させ、尊び、信仰の対象であつた自然や山々は、開発をするための資質、資源に地位をおとした。

国も人々も、こぞつて物的意味（例えば金銭、商品、売り物など）に、最大の成功と大きな価値をみいだすようになった。敗戦国であつた日本は、ヨーロッパ、アメリカなどの価値観に従い、それが先進国という価値になり、一般的な民衆の大勢となった。

先進国という意味から、我々は何所に生き、何所に進むのだろうか？ 多くの科学者は人類は宇宙に行き、ドンドン開拓をしていくという考えをもっている。しかし、本当にそうなのだろうか？

科学者は、自らの個の発明において、その単独の価値、金銭的利用法に、或いは榮譽的事柄に埋没し、『スバラシイ発明　これで儲かる公式』に没頭した。それは世間的、金銭的には成功だった。

しかし、果たして、それらの発明技法が大衆の中に落ちた場合、制御たる意志が効くのか？ 数十年たった時にドンナ反作用があるのか？ 無数の開発要因が絡んだ場合はどうなるのか？ そこまで計算できるものは居なかった。成り行きとしては、こうにしかならなかったと言えなくも無い。しかし、今の現実重い。

世の中には、科学者や学者たちが予想しえなかつた難解な答えに、呆気ない答えを出す者達もいた。アメリカに住む先住民の一部は、彼らのやり方では上手く行かないと断言する者も居た。「戦に負けた先住民の負け惜しみ」と文明をひた走った者達の多くは、そういうもの達の言葉を気にもとめなかつたのだ。

我々の世代は、すでに生まれた時から、疑いも無く社会システムに近代文明的手法が満ち溢れていた。そこに生まれた者たちは各家族から学校、そして会社へと疑うもののない日常があった。

しかし、今、我々の日常は、大きく揺らいでいる。すくなくとも、私はそう感じた。

私は解の無い時代に対し、なんらかの解を模索し、今が一体どうなっているのか、まずそれ

を把握するのに苦心した。科学、自然科学、歴史学、政治学、宗教学、予言書、地学、鉱物学、霊界諸真理、天文学…、別に、学問的に学んだ訳ではないが、私の中の何かもっと明確であるはずだという漠然とした魂が、真の解を模索してやまなかった。人はこれを真理というかもしれない。それを悟ったものを昔は賢者とか言った。そして国々にある賢者達の幾多の真理は、同じく宗教などを生んだ。私もまた、信仰宗教的持論を称える輩の一人であるかもしれぬ。

お釈迦様はこういったそうです。私がさってから長い時がすぎる。そして世は、末法の世界へと入る。

確かに、今の混沌状態や環境問題をみれば、誰しもまずいと思いながら日常に没してゆくのであります。

我こそは、と旗をあげて埋没していく諸団体、諸真理、現代という混沌、カオスに対して、なすすべが無いかのように散って行くのであります。

現代的混沌は、結局のところ、経済の一方的追求という意識(プログラム)を使うかぎり直らない。私はこう思うのです。

そして、この混沌は自然に対してのガンの作用と類似していると。

とすると、人の世界は、元々、自然に対するガンなのかというところ、そうではないと思うのです。

近年、著しく、死亡要因にあげられるガンなのですが、やはり、それは、何らかの狂いから来るものと思うのです。

科学、経済は万能的意識の積もった結果は、自然に帰らないゴミや物体を造ることとなり、その行為は生きた自然や土地を汚染する。大きな自然や地球という母体に対するガンに類似していると見えるのです。

農耕と生活のバランスと自然のサイクルに準じた生活から、儲かるからといって、原油を持ち込み、無闇に工場を立てて生産の限りをつくした結果、子供たちはこの使い捨てシステムに疑念を抱かなくなってしまった。こんな事が恐ろしい事ではと思うのです。

現代では神社の木に縄が巻いてあり、豊があるためなんていうと、キチガイ扱いする大人も居る。信仰として拜む対象から、無意味な物体、金になる資源となった自然、この精神的な変貌を私は病の原因ではとらんでいるのです。

日本の意識の代表として、天皇家につたわる神話、古事記によって、日本の数千年来の意識はあった。その書物では、自然と人の中には密接な関係があった。

神は、鳥や自然としてあり、そして、その中の神たちがやがて人である姿をもって行動するようになる。

この神話の中では、神の元の姿は鳥だったりする。そして、その鳥の霊が其処の神であり、その霊である神がやがて、人にやどり代行者として行動するようになる。大きくは月や太陽も神としての神があり、その代行者としての神人があったのだ。

この神的世界では原理的に、自然の無作為な破壊は起こらないのだ。何故ならば、山や島は、ある意味で、大きな己自身であり、仮にその己が統治者ならば、自爆せんとするような乱開発をするはずもなく、木一本切るにも、なんかの因縁のものかと、伺いをたてたりするのが世界観となるのだ。ここには、勿体無いという言葉も生きている。

自然や土地をみて、直ぐに電卓を弾く方法を我々は学んだ。しかし、それで本当によいのでしょうか？ それは、一見知的な意志の中に有り、更には自由という権利があるという、その

方法は、私には、それは理性的なのではなく、裏にある膨大な真理を無視することになりたつ架空のものであると思うのです。

私は思うのです。人理的、道徳的にも、裏の公式を無視しつばなしの、企業中心の社会は、終わりにしなければならないと、裏の式からはなれた分、社会には、ストレスや、病が溜まっているのだと思うのです。

ジグザグに、右上がりの上昇を望む公式は、必ず破壊点が訪れたしまう。その前に方位を、軟らかに下降させ、円をなすためには、科学や経済では無い道が必要なのです。

わたしは、この道をなんとか、模索すべく、研究をしてみました。そこには、不明瞭な、解、困難なもの、中途なもの、レベル低い回答もあります。中には誤謬もあるでしょう。しかし、全く、クラヤミの地図なしよりは、幾らかは、ましな方向をみる手だてにはなるものと思えます。

闇の夜で出会つた月のあかりなりけり

都会の歓喜とは

日本は戦いに敗れた。そして、敗戦国である我が国はGHQ主導によって、日本国憲法が制定された。

第二次大戦などで蓄積された諸国の軍事技術は、現代産業の基礎となったといつていいだろう。

幕末後、国家の認識は、大きく変わった大政奉還を果たした徳川幕府は、姿をけし、やがて、天皇家を推す開国幕末団を中心として、議会政治制へと移行していった。歴史的背景からみれば、武士の時代は戦がものをいった武士的な日本のイメージも、平安貴族以後の世界での成り行きだ。戦いを繰り返して、いくつもの時代がすぎ、今にいたる。

歴史の中で、戦いは幾度となくあった。しかし、世界と交流がはじまった頃から様子が変わってきた。黒船、近代兵器の出現で、もはや、刀や弓で戦ったときはまったく異なる戦争になった。

世界を相手に戦う。多くの者は、そう思った。世界が襲ってきたら、どうするか、植民地化される日本。そうなる訳にゆかない。

しかし、戦争の火は、もはや、余りに大きくなりすぎたのだ。殺し合いには、ルールはない。いや、殺し合いとて、昔はルールがあったのだ。

人は畑を耕すことを見つけた。これに、使う道具は豊かな物を生み出すことができる。これによって、生きるための食物を初めて確保できる。しかし、大きすぎる火は、なにも生まない。

自然崇拜のある日本では、御神石とかいって、石を奉ったり拝んだりすることがあった。直感的に、あの石には何かあるという靈感のような微妙な感性が的を得た行動をとっていたのだ。石を、苔と森から拾い出して、磨いて拝むなんてことをするのは、人だけが、昔の人間の感

性は、かなりのをえている原理があったのだ。

石は、原理的にも、マグマ地球の時代から、カタチを成した先祖なのだ。自然物の中に、意味の無いものは無いという感性が的を得た行動を、意識を人にロックさせていたのだ。

原始地球にある石達は、意識の基礎となった。次に、陸に現れたのは植物、木々である植物達は石達にくらべ、増え移動することも出来た。ある意味で、動かぬ石達に全面的に勝つたのだ。それを蓋うことで、此れを緑や木々とするのならば、この者達は、次に顕れた動物には、勝てなかつた。グー、チョキ、パー。三つの均衡のとれた世界は美しい理があった。人間は、チョキで木を切る。しかし、石には勝てない。

人が自然界のある物を無意味であるとして以来、石ころは無関係なものという境界線が、心に出来てきて、ついには、チョキチョキ切ること以外、考えなくなつたというのが、大半の原理だと思つたのです。これは火を大きくするのと同じです。

石というものは、単なる石とも見えますが、それは意思でありたいのです。これは冗談や偶然ではなく、日本の言葉は深い意味の重複制があり、言葉、その発音、意味、心において、霊的にも何らかの相応性を語る言語であるといえるからです。

言葉は神であり、特に日本語は、カナニ神の名といつくりの強い意味を持つています。母音の五つの御柱、48の御柱と神の働きを、示すのに相応もします。意味の重複も、言葉遊びではなくあるのです。方言は地域の身体の各機関の働きの違いとみれば良いのです。日本語の方言を強調すると、外国語にもなるとも言えるかもしれせん。また、外国語を柔軟に取り込む事が出来るのも、元なるが故でしょう。しかし、正統は日本の古語であり、学ぶ方向は此方を向いていないとなりませぬ。

コンピューター、チップ、シリコンも、つまり、石なのですが、あのなかに見えない原理が刻まれた石があり、現代において、飛躍的な言語が、動いているのは現実です。自然界の石の中に霊に意思があつても可笑しくないので。木々に霊の体を整え、最終的動体である人に、霊がやどり、本人であるとしたら、どうでしょう。

木々から、取れるのは柱です。日本の神話では、神は御柱といつたのであり、柱なのです。柱を組んで、家をつくり、その床の間に名石を飾る。これで、一つのカタチの完了があるのです。人の魂は、意識はまた肉体をはなれ、形式をこえ、霊界や自然界などに帰っていく。

しかし、これは人の精神が、石といつものに価値をみつけ、或意は自然を最終的に身をゆだねる友とした場合です。大きくは星もまた一つの自然です。

かりに、現在の大衆意識的経済信仰原理、科学信仰では、人は自然を無意味に切るものとなつてしまつたのです。このマチガッタ、プログラムを大衆的、多数人が使うだけで、心無いと形容されるような大都市国家をつみ、語謬である人の意思が、幾つも重なることで混沌が発生し、結果、ガンのように大きな身体すら、滅ぼす結末を容易にしまつたのです。

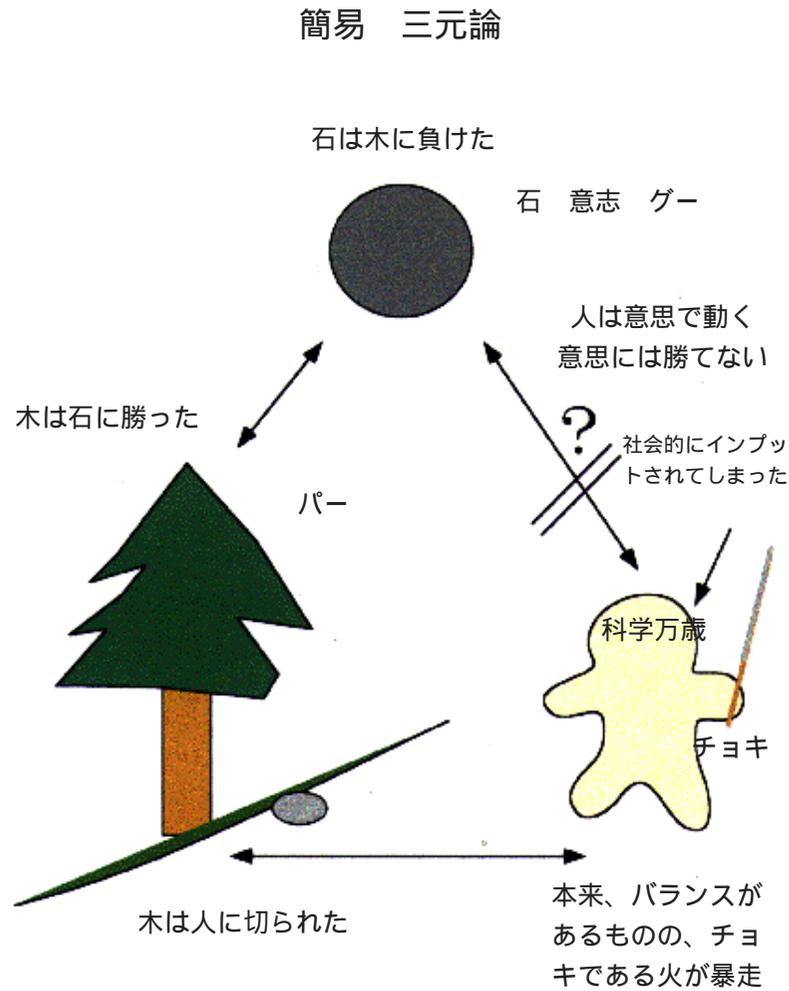
簡単な極みなのです。強い物がち、あるいは物を只管に追つ。『金』、また、我さえ良ければどうでも良いという原理が長い目でみると、自爆線公式を形成しガンになつたりするのです。

また、経済的、物的反映都市は、姦淫の色情、極めて大という裏のメーターに、中々気がつかないものです。

実際に、色欲にふけらなくとも、車を次々と乗り換えるなんていうのも、擬似的な行為でもあるのです。

一つの物を、長く使うことは、純粋な夫婦愛にもどることです。使い捨てる社会的間違った

グー、チョキ、パー



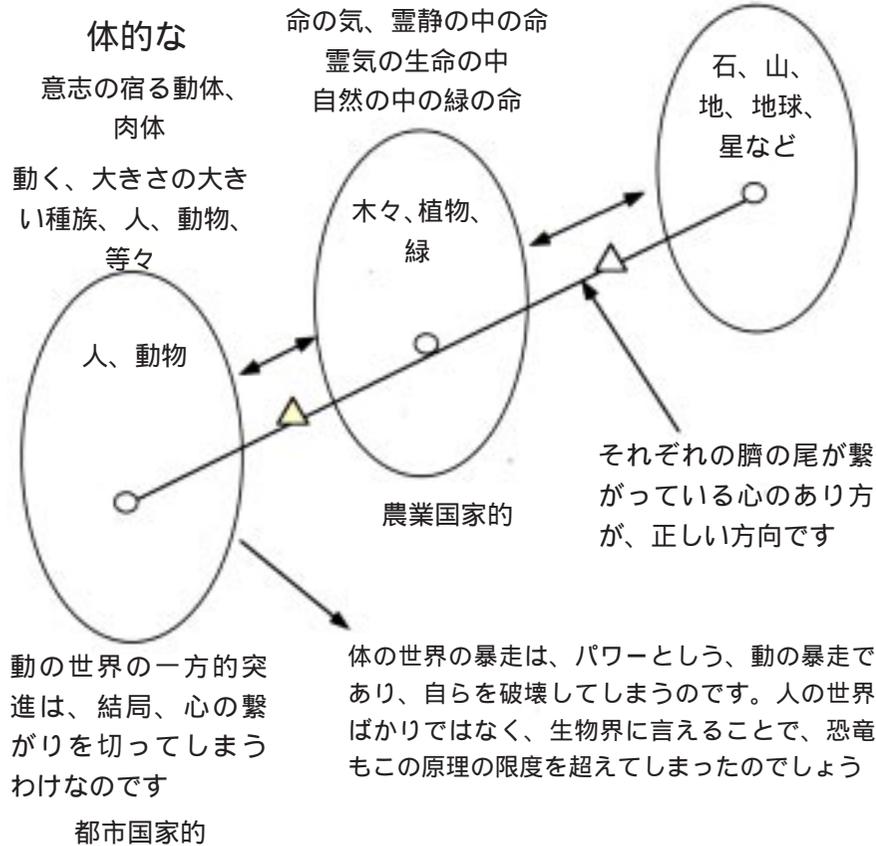
自然への敬意の念が整っていた時代は美しい

方位はこのへんに、原因があり、精神的に考え直さなければならぬ病気の元です。戦後は、横にあった見えない自然との繋がりを全て科学の威力で迷信であるとしてしまったのです。だから、すべての調和は断ち切られ、ここに迷走をするようになったのです。だから、個々の物品には、強くとも、自然界には、帰らないものを量産してしまっただけという、背景があり、その結果は最終処分場や夢の島をみれば、その幻想具合がわかるのです。これらの場所は、本当に癒したいものです。いや、癒さなければならぬと思つたのです。

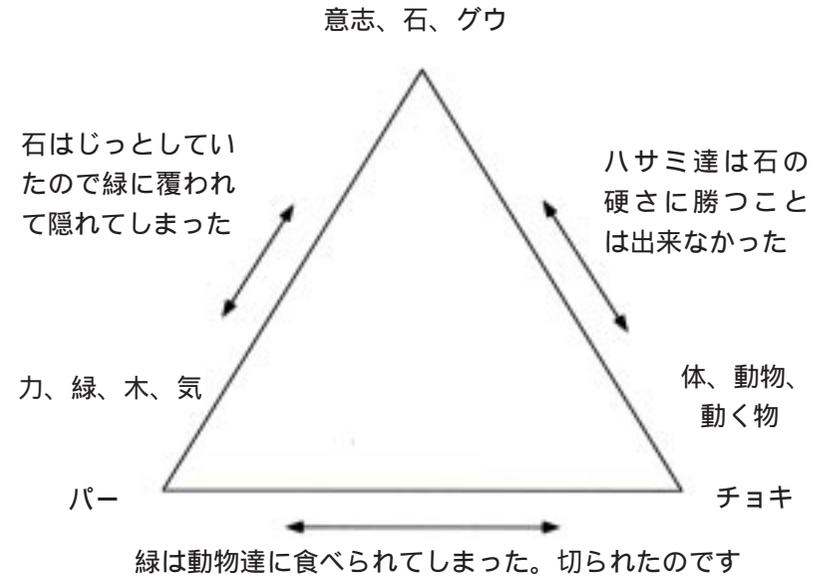
夜の浮かぶ月も大きな石なりけり

つながりの霊線

自分の基礎が存在する、それを理解すると、自然破壊は霊的には己の礎を破壊することになってしまいます。動的、世界のスピードを、上げる行為は、ある程度以上は、自爆行為になってしまうのです



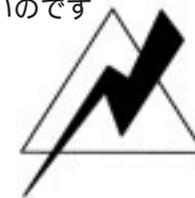
おおまかな、三つの力図



右、左、中央、月、日、地球、色や光の三原色、父、母、子、善、悪、命、天、地、人

こういう三つの原理は何らかの理にあるもので、循環、バランスが生きた原理や永遠という状態を構成しているのです

バランスを失った世界は長くはないのです

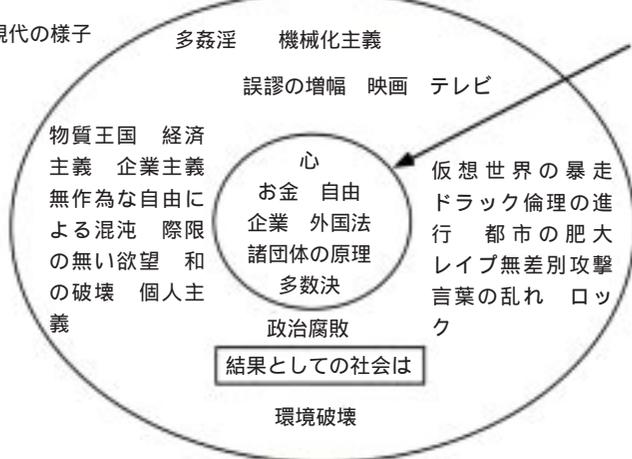


永遠というものは時間の中にあるのではなく、永遠は形の中の存在しうるものなのです

政治の心と体

国家というものは、一つの龍神のように大きい。国は一つの意志として、動いているはずなのだが...

現代の様子



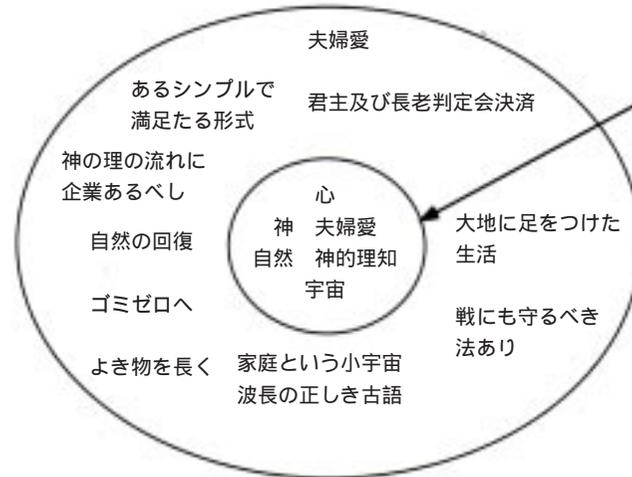
国家の心である動きは政治がになっている

自由というのは聞こえはいいが、無差別な自由は混沌の結果に

これまでは、自然界とい精神の源を破壊してしまうのです

内的永遠を掴まず外宇宙に暴走するという誤謬も、また怖いものです

これはあくまで理想であり、君として、どんなでもない者が上がり易い欠点があり、その判定を早まると逆送も



神という原理の回復

神的理知の深淵な判定

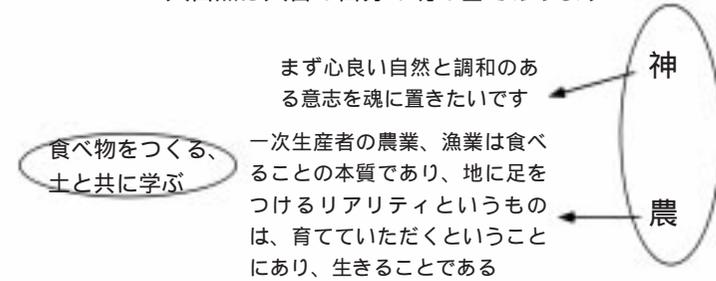
宇宙に、つながる生き方はハイテクではなく此方なのです

生きた神の方位は方向、起動ともに安定方位である

宇宙的に美も神のフォーム、カタチの理のあらわれである

神農工商

大自然は大昔の自分の魂の基であります



生活必要物質はある、服、家、等々、しかし、此が上になつてはならない、逆立ちの世界は見ての通り、苦い教訓だともう

シンプル化が課題であり、リサイクルと浄化は必至です

商い、強い世界は駄目なのである。大量消費贅沢ひんのなど、価格破壊は自爆と同じ原理で世界を引っ張ってしまうからだ

銀行が強いなどという社会は、政治や国家にもはや威厳日本の美、神の調和がないのです。その理由は、国家が神を拝まなくなったためです

纏まりの悪い、まとめ

つくづく思うのは、政治の取り違った心、意志、神の国の光と威光が治めていたこの国には、多数決、無差別平等、自由経済重視は恥ずかしいのです。
金で動かない練習からでしょう

合理的自然観 VS 真理の自然

近代の自然観は、主に自然を物質的、マテリアルであることに意味が絞られた。ヨーロッパからやってきた合理主義です。これによって自然は人間と対立関係にあり、自然は制覇してゆくべきものとなった。

世界は広いひとつの国をとっても、日本より大きく各国多種の人種がありその驚きに満ちた生活形式、壮大な土地、また、大きな諸宗教の発生の地や歴史、日本よりも秀でた品物などに、圧倒されがちだと思つ（実際圧倒されているが…）。

実は、近代の合理的主義の概念は世界の中でも僅かな地域で始まり、あつという間に、近代資本主義的概念論を形成した。

世界の宗教的概念を冷静に調べてみると、極めて、地域の特色を色濃くのこす神話が残っている。国々の人々は、個々に、バラバラだが神話をもっていた。意外と、神的なものへの意識はあった。それが、ある時期に、世界一斉的に今風になった。人々が増え始め、文明的物の歎喜への疾走が世界中ではじまりだしたといつていいだろう。人口が極めて少ないころ、失われてた楽園の世界があつたのかもしれない？ 人口が横ばいから、急速に増えだすと共に、生活形式はかわり、お城や文化など、今では考えにくい世界があつたと思つ。人口程々、神的精神概念に通ずるものが、その人口とのバランスをとつた時代は、今では作れない。傑作的なものが多い。

現実の人口は、極めてピークにあると思つ。精神的というものが誤謬のペールで覆われていて、その多数の人の好む芸術は多いが、本物が少ないのであつ。

結局宗教的概念が、その地域での気質を保っている訳なのだから、宗教的概念の違いによって、結果戦争を繰り返されたのであると思つ。国の神を、誰しも拝み語つたであつ。此処に幾多の混沌なる原因があると思つ。あるものは、神をすて、ある物は違つ神や教えを拝む…。

こんな中、人々の思いは直ぐ潰れる国を捨て、あるいは、戦によって、古い精神観念を放棄し、物的資質に命をつなぐ手段の最善に置き換えていったのはと想像できる。そんな中、革新的に近代的な手法が開発されていったのだらう。

そして、近代的学術的概念は勝利しつづけ、現代では、すべての神話をおとぎばなしの世界として、封印することに成功したのであります。

かくて、科学は驚異的事実を書き換えつづけた地球は、疑い用も無く丸く、驚くべきは、宇宙空間なるものに浮いているという。現実事実を突き付けた神話のホシボシは、銀河という共同体のなかに属し、さらに、宇宙は見当もつかないほど広いと、地球の構造も、わかり始めた、また人口衛星はこの星の姿を我々に見せた。

我々は、学術的事実のみに驚異の答えをみいだした。しかし、本当にそれだけなのだろうか？

確かに、素晴らしい調査結果なのですが、それは、外面的観測結果の集合であり、それは、そうなっている事実を、正確にとらえただけのものに思つたのです。

それは、丁度、表の原理の測定が終了したのであり、身長、体重、の測定が完了した程度の物ごとではないのかと、私は怪しむのです。

科学者や霊の探者は、ここで大体霊の話や、あの世の様子といった物ごとに終始するようになり、科学者達を納得させることは出来ず、平行線をたどるものだと感じるのであります。

しかし、総合性の点で、言えば、あの世の写しが、この世であり、また、霊的な動きの、神話性と対応しているはずですし、そうでなくとも、大地や地球のカタチの意味も、極めて深い。神性な意義を完全と示すものであるはずだと、私は考え、ある種の原理側を発見することに成功したのであります。この発見も、迷信的漠然とした要素を含むものの、ある理法を見ることが出来ると思っております。

科学的資料のおかげで、霊界、現実を含めた総合原理を開拓する先駆けとなるもと思っております。

ここでは、大地の何故あるのかという解を、主に示します。これが解ると、いままで、大地であった只の地形が、生きた意味のある法則的照合があるということを、直感的に或意は革新的に解るのです。

現代では、意味の無いと定義した大地は、死したマテリアルであり、意味のある大地は神の大きな肉体であり、乱開発等はお断りなのであります。

愚かにみゆる神の知に最後に科学は敗れるなり

勾玉、日本という純粋な無のアンプリファイアーが有の外国なのです

五大、母音というのは、神の名前であり言葉は神なのです

神がどういう、御神名かは別の問題です

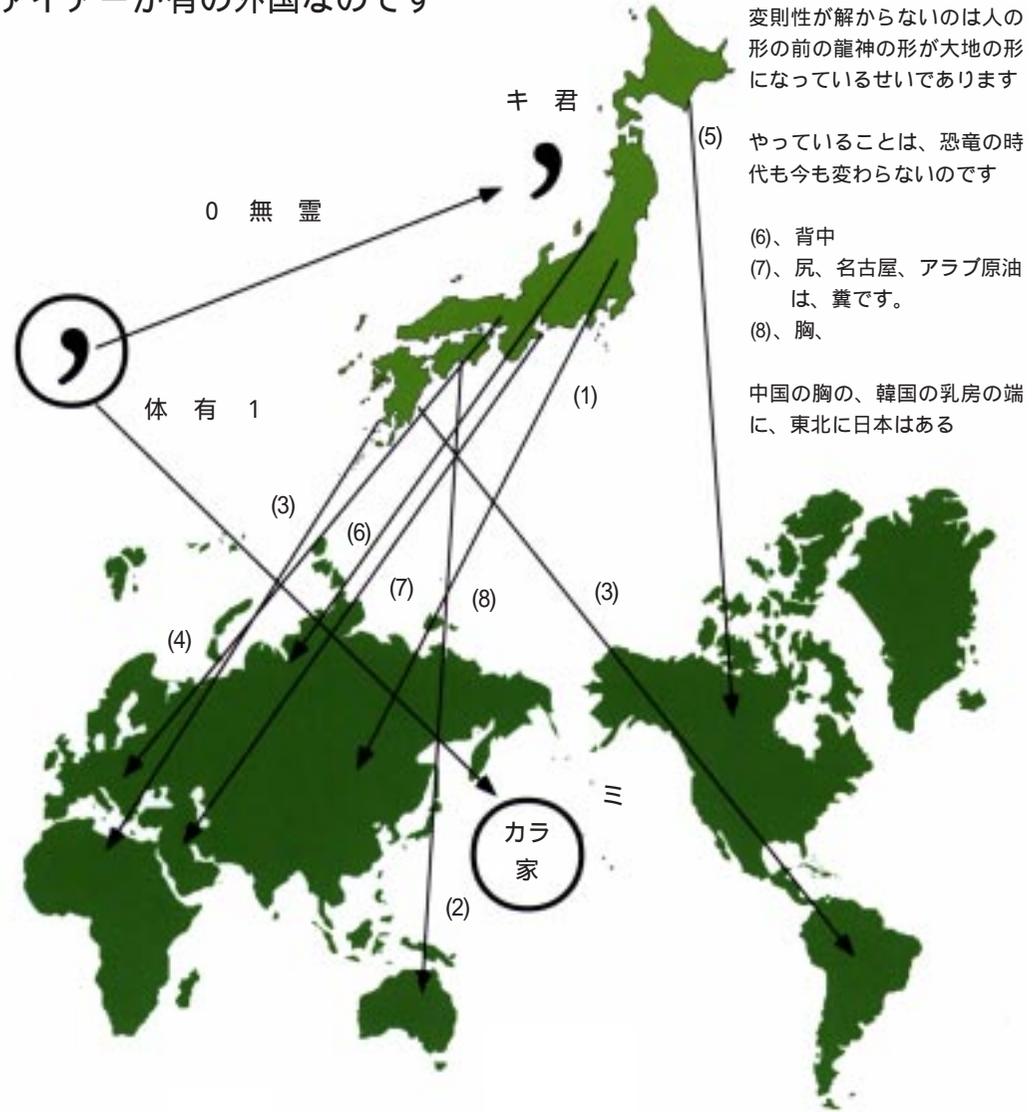
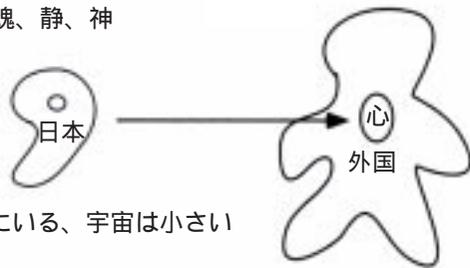
- (1)、ア、東北、アジア、上半身
- (2)、オ、四国、オーストラリア
- (3)、ウ、九州、アフリカ、ブラジル、足
- (4)、エ、西、ヨーロッパ、下半身
- (5)、イ、北海道、北米、頭

大人は動

改善は神の方向からです。
外なるものからの働きかけは、心の精神の改善にはならない。何故ならば、命の方向が違うからです。

本当の大人は、大きくなっても神と真理をしるものであります

純粋な、魂、静、神



今こそ皆人の姿だが、その昔の巨大な龍神の写しこそ日本なのです。無論、今は総体のその神も、人として頑張っているのです

日本は世界の中心であり、巨大な龍玉であり外国というもっと大きい大陸の勾玉であり大陸は大きい拡大なのです

大地は神の肉体であり、精神なのです

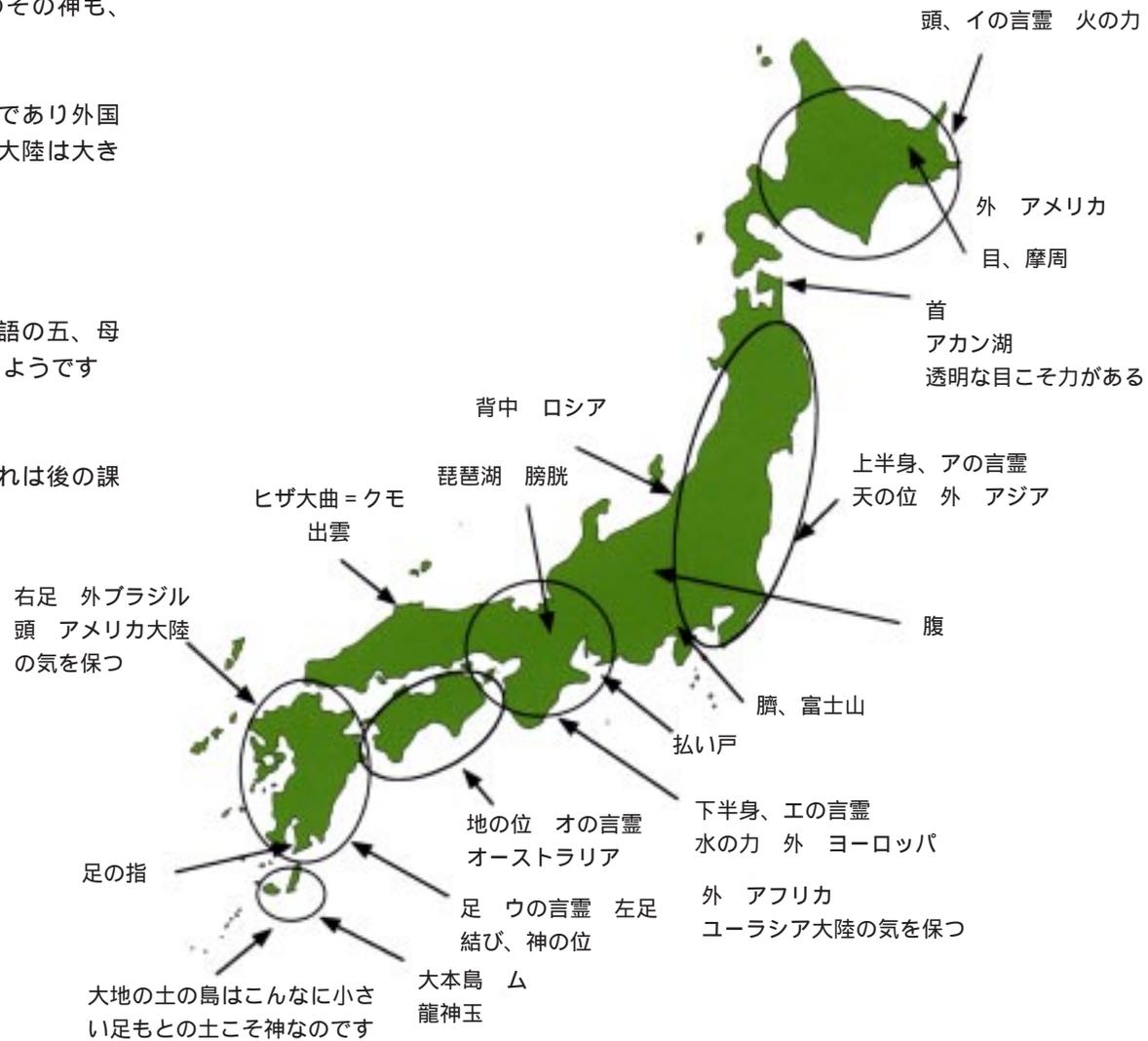
言葉は神の法則であります。特に日本語の五、母音は意味と真理と音の同期がスバラシイようです

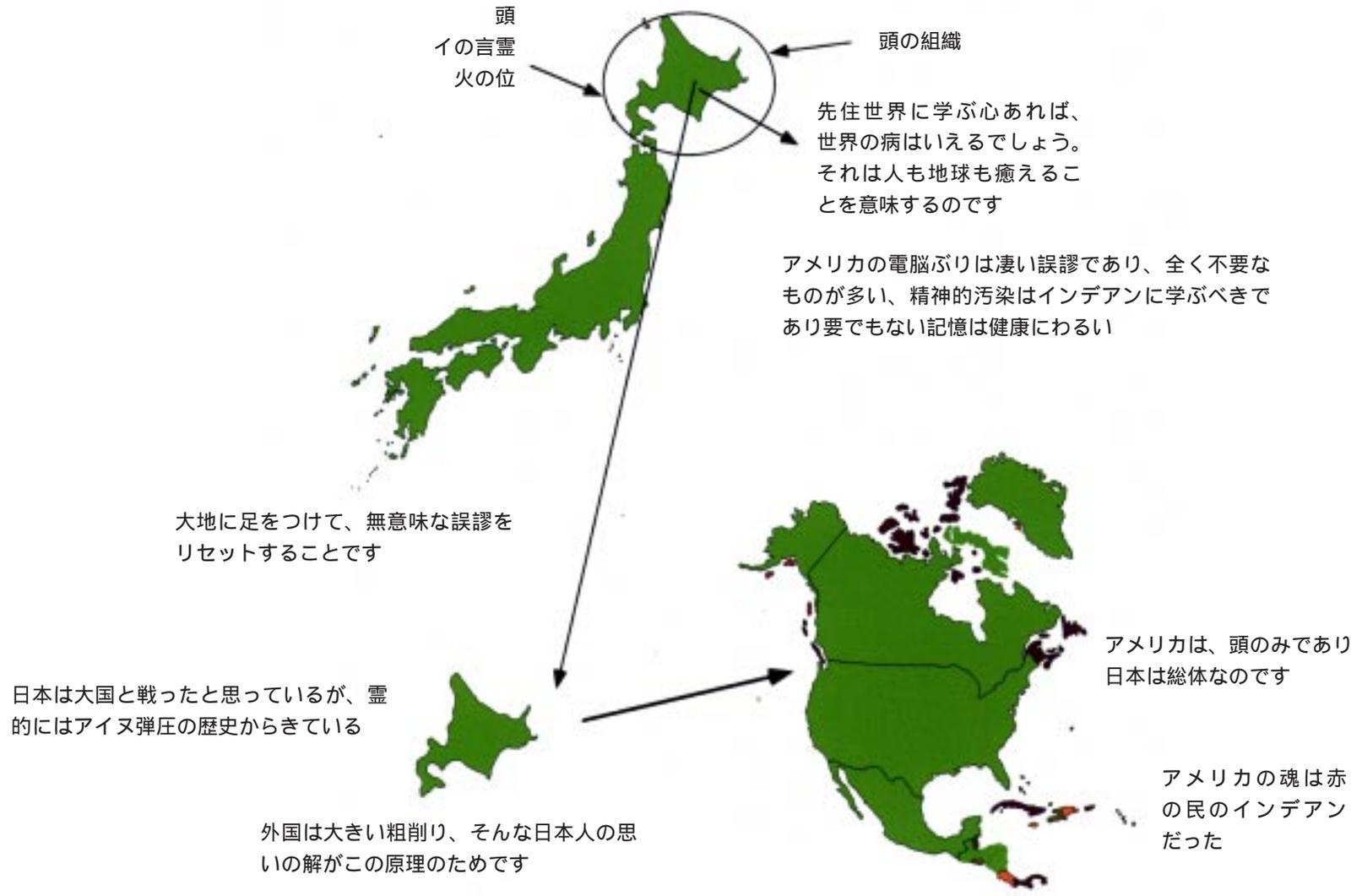
ムー、アオウエイ

神話の誰が該当する神の姿なのか。これは後の課題としましょう

古語は命である

神の身体である大地は漠然としたものでなく、意味があったのです。恐竜身体時代の息吹が、生命と大地との相応があったようです。中国から分離して、陰陽論があり哺乳類や、人の時代となったのかは研究中です









東北のなかで

日本の位置する位置は世界の東北にあたる。北半球の最も東の国です。日本は小さいが世界の勾玉のようなものであり、シンプルで内面的純粹さと奥深さと神秘的理の法があるべき場所であります。

昔、日本は神の国だから、負けないという感情意識があった。大陸から来襲した元の軍隊は、二度にわたり神風によって海中に没したという。この調子で世界大戦をやったのだが、結果、神風は吹かず、天運も降りてはこなかった。

結局人口の推移からいうと、精神と人口のバランスの取れていた時代をすぎ。もはや、多数の曲線上の原理で物ごとの精神は精神であるという認識だったのだと思う。

しかしながら、多くの人々は黒船みたいのがやってきて、大陸同士で近代兵器で戦争をやっているのを見たら、自衛手段としての、それを遅れてはならないと思うのはやもつえすとも思いません。

戦艦をつくり、飛行機が飛び、元々、刀で切りあいをやって勝ち抜いた武士の時代のなごり、精神的な押えを利かすことは難しかっただろう。

近代兵器戦において、その歯止めの意志を作ったのは、皮肉にも核兵器だった。つまり、戦争をすれば、双方自滅、住める環境もなしとなっては自爆というワードが、つまり、人によって、全く不要な火であるという高い勉強の代償なのだろう。神も宇宙も、自然にも、禁止事項がある。其れはないという法則がある。そういう精神論から大きく逸れた人々が世界を動かすようになったとき、危険ラインにあると思う。

そして、世界の地図が見えるようになると戦争にたいする概念変化が訪れた。情報が瞬時に大衆に行き渡るようになると、国際的、あるいは国同士の牽制が続き、また、大衆的社会で軍国的精神を持つ者もいなくなっていった。原理側は無くなり、これをして、平和になったとする者もいるが。

精神的には、天地創造の世界、人の小集団世界、中規模世界、大規模世界、都市国家世界、人の小集団世界を賢者の古代教会的レベルとすると、軍国的精神というのは中規模の後半、大規模世界にいたる意識であると思われる。現代においては、軍部が政治の実権を握るというのは考えにくいものです。

昔ならば、ダダダーというのがでてきそうなものですが、では、仮にそうやって国家を諸問題を解決できるのかと考えたとき、首謀者は切腹に至るしかないと思うのです。何故ならば、土地や宝物を得るために戦をした。時代はすぎ有り余る物の、暴走に歯止めが利かないという極めて困難な体形に、物ごとは推移し、しかも、情報は瞬時に国々に渡り、勝手気俣に振る舞っていた大衆は、逆に、牙をむくでしょう。なにも持たない相手に発砲することなどできず、意味の無い破壊はできないのです。

では、精神的力で納得する政治を築くために政治家になるかというところ、現代では、物的資本の大量投入した者ほど、構造的に選ばれるシステムが大半であり、精神的意思を政治にもとめることや、企業に対抗できる人物を選ぶのも構造的に不可能に近いのです。

万事休す。あとは、都市国家のガンの行為に自然界のバランスが耐えられなくなった時、津波が襲うなり、寒冷化、隕石、等々、不測事態が人の解であったのか。都会の知識人は、こんなことを考えて、むなししい性を人間がという結論に浸っていると思う。

しかし、これは大きな誤りである。自分達の知識が全てだという解にしがみついたために、このような結論に落ちると思う。

インデアンのタオス族は、彼ら、つまり、アメリカが滅んでも、我々は滅びないと、確信をもち、断言するという。それをリポートする白人は首をかしげる。

アフリカの民も、チベット山脈の民も、モンゴルの遊牧民も、結局、隕石が落ちて全滅する映画、宇宙人がやってきて滅ぼされる話、都会の人々の歓喜は、自爆するためのものが、大半をしめるように、その精神プログラムが投入されてしまっているのだが、彼らはピルの頂上で、グラス片手に思うに、彼らは、世界の支配者と思ひ込むが、実際は、地球的道具箱の品物を幾つかあつかっているに過ぎない。最近では、必要物資外、商品が余りに、肥大化してしまった本来必要製品も、後の事を考えて、吟味しなければならなかった。

人の世界の先代である。恐竜達は、激しい生存競争の上でドンドン巨大化していった。攻撃系も、姿、生き方、様々に繁栄を誇った。しかし、肉食恐竜の鏡である恐竜が、全盛をほこったころ、大きな異変が起った。其れがなんでもあつたかは、推測はしない。

生命の歴史のなかで、栄華を極めたものたちも自然と姿を消す。そして、再びあたらしい世界がひらかれる。

人の世界も、また、恐竜の類似するのかというのと、どうだろう。宇宙が幾度と無くあつたとするならば、地球もまたあつたにちがいない。人もまたいたかも知れないと、強引な仮定を無謀を承知ですと、成人式のような時期も合ってもいいと思う。生命の命というものは、結局、石や星の命に比べれば、水物で、この花ちるようなはかなさがあるのかも知れない。しかし、これから、夫婦期、家庭期、熟年期、老年期、昇天、太陽系の豊的移動となるまでには、長いのではと思う。このまま、暴走、ヤンキーとロッカーで『都市的な』世界を、潰してはならないのだと思うのです。

いまの、やり方は極めて恐竜的に近いと、わたしは思うのです。大企業の暴走といい、ドンドン大きくなるやり方といい、はたして、この暴走を止める手だてはあるのでしょうか。日本という、巨大な龍神は、まるで、暴走トラックのようになってしまったようであり、各国もこの波動をうけてならつていっているのです。

龍というものは、法力の玉をもつと中国などでは言われている。また、仙人があやつるとも言われている。現在、政治をするのに、山での修行をマスターにした仙人に、国の方針を尋ねに来るものもなく、法力の玉、王や、君主たる人物たちも、どこかにいってしまった。一体何所に？

これでは、動きに、法が備わる訳が無いのであり、神力というものでもないのです。

チカラというものは、本来理法によって、機能しなければならぬ、どちらが分離しても、上手くはゆかないのです。

世界の東北の位置に日本はあるのですが、日本が世界の勾玉だと、するとその役割は、重大です。

そう言えば、昔は家を建てる時、東北の方位を汚すと何らかの障害が起るといふ迷信があつたようです。其れを考えると家という小宇宙も原則として、日本の位置的な意味合いを、裏の法で受けているようです。自分の国のある方位に、自分の家でトイレを建てたら、自分に懸かるおそれがあるのも、もしかしたらそんな大切な裏原理を我々は置き去りにしたのではと思うのです。

最近の建築家は、美的外観と間取りと敷地計算と国家土地基準、云々で、すべてOKなのですがどうでしょう。

勾玉の日本に心もどりはば世界の闇も晴れ渡るなり

宗教とは

我々の生まれた現代では、宗教というものは、あるカテゴリーの中の一種の独特なものとなっていた。冠婚葬祭、新年まいりに、カタチとしてあり、何の疑いもないものであった。学校では社会科の時間に歴史とともに、何年に戦争があつて、王朝が何年設立と流れれるように頭の片隅にあつた。家では、テレビをつければ、政治討論云々、政権交代とそれは当たり前の日常だった。

たまに、皇室の話題を聞く。武將の支配した幕府の滅んだ後には、大日本帝国は万世一系の天皇を統治者とするとして政権がひらたい。戦後は、GHQの指導で自由民主主義というものが日本に投入された。

このなごりで天皇家は、象徴として活動するという。流れるにはそういう事らしかつた。政治と象徴天皇。これは、宗教的思想と政治の分離を意味する。この圧倒的な意味を放り出して、国が良くならなないと嘆くのが現代なのである。

そもそも神書たる古事記は、平城京を中心とした時代、天武天皇が稗田阿礼という人物に作らせたものであり、そこに諸神話はある。この700年前の文章が引き継がれ、やがて武士の時代をこえて受け継がれた訳なのである。

古事記、日本書記は、高度な霊的書物であり、それが受け継がれた系譜というものはそれだけで賞賛されるべきものだろう。

宗教というものは、理法なのであり、現代ではその重要性は気が付かず、「あー、宗教だろう？」的感觉がある。その感覚には、なにか逃げ腰の感覚と懐疑の念があるだろう。

わたしもそう思っていた。しかし、世の中の問題をたどって行くと、宗教的概念に行きついてしまう。ここをこまかしたのが現代の諸問題の原因だと結論しやう得ないのだ。

天武天皇にしろ、その周辺貴族は、結局優れた霊的感覚や知識をもっていたのだろうと思う。そうでなければ、国家の礎となることは出来ないだろう。

歴史的にいつてしまえば、それ以前のヤマト朝廷や、もっと前の土器文化的ものや、それ以前の前にか不明な勢力もあるだろう。しかし、フデと紙の出来たころ神的書物を編纂した、霊的なレベルは極めて高いものと推測できる。

民が拜んで、大丈夫な何かがあるとみていいだろう。今の政治家とて、多数決とはいえ何かないと、総理にはなれないと思うが……。

当時の民たちが家に筆もないころ、そのような書物は、人民から解読すら不能であるつし、神が示したとしてもおかしくはないだろう。史実、天皇家としてつけつがれているのだから。

神を奉るといふ行為は、王として、当時は当然の行為であった。その神に知的解を求めたり、直感的悟りを得たり、あるいは民達の信仰の対象として政治と宗教は、一体のものだったと思う。

というより、現代は別れているから、滅茶苦茶なんだという。解を結論しなきゃ得ないのだ。頭と体をちょんぎって、上手くイカンといっても、それは根本的におかしい。

個人の時代、個々のものが自由にふるまったら、国家の全貌は亡き顔になってしまう。それでも、人間自身の生きた自由だといえばそうかもいけない。しかし、無作為なルール無用の自由はない。ルール無用に近づくと、それは混沌になってしまつからだ。

混沌が、何故危険信号かは想像していただきたい。我々より、遥かな大きい、太陽や、地球、月など、完全な周期則を描いている。これも言い換えれば、厳密な「理」であり「法」なのだ。この運行のなかで、生命の環境もあるのだ。ここから生き方にも、無論、禁止事項や、逆走も発生するのだ。

警察が、暴走行為をするものを制する。これをして、国家の義の法がある。そういう行動にすら、「良いじゃねえか。己らの自由だ」という。行為は通らないし、そのとき突っ張った人も、後に逆の立場になることもある。

無作為にぶつかる激突星雲のなかに、静かに浮かぶ青き地球があるのかというと、絶対ないのであって、同様に、美しい大地を守る。則、神律がある。

ここで思うに、現在の環境は美しい地球の律に合わないのだ。合わない法を使って、世の中を落とす行為をすれば、砂漠化、緑の皆無世界、黒雲焼けた世界、こんな風になりかねないです。

街にあふれる音楽を耳にする。演歌、ニューミュージック、ポップ、ロック。ほんとにいるんな音楽をつくるやつがいる。彼らは誕生し、その表現を心に聞いて、あるものはロックし、あるものはクラシックする。

好みの専用波長があるのだ。波長は周期であり、リズムは楽しさをきざむ。音色や音色は、色彩の絵をみせる。

現代はあまりにロックが増えすぎたのだ。ロックのデザインは、なんとなくイメージできるだろう。音楽が魂の表現だとすると、そういうことごとくなんだらうと思う。

善は善。悪は悪。これがハッキリしなくなったのが、混沌だ。悪というものはあるわけなんだけれども、それも、善があったこそだ。物ごとには方向があり、それがつかまれていれば、多少のことは問題ない。方向性を不明にするのが悪のやり方であり、悪はその業に長けている。

太陽とて銀河の一部であり、その銀河がお隣の銀河と、100億年後、一緒になるうと思っ

ているかは知らないが、とにかく、方向性があり原理はある。ロックやデスコ音楽なんかは、レコードを逆まわりにしたりしてハイテクサウンドとして喜んでるが、それを見て学ぼうとするものが多数を占める。世の中の常識であったはならないのです。

かりに、自然界に近い音楽を奏でるものの、魂はいかなるものが、つまり、同年代でも心にある絶対値が違うのがおわかりでしょう。

これと同じくして、古事記や日本書記を編集したものの、魂はその次元に近いといえなくもないのです(ホントのところはたぶん経路で、立ち上がったのかはわからないが)。

仏典も、キリストも、教典も同じです。世界の宗教も氣質があり、法があるでしょう。そこ

から、芸術や音楽も生まれております。

何所の国が、ドウイウ物を好むか、どういふ波長傾向をもつか、また、年齢と好みの音楽なんていうのも、現在の精神氣質を影で見破ることができません。

この性質は、食べ物には相応の関係式があり、これも音楽同様です。

アメリカから戦後あたえられた法というものは、物を少し考えてみましょう。自由、ロック、映画、ファーストフード。

さて、日本の政治はもはや経済意外の何もみななくなってしまったのですが、これもわかり易い結果です。法案に盛り込まれた言葉は、凄いちカラを發揮している訳なのです。

宗教的觀念から政治に流れ、結果、人民や街があり、其処にあるものもあるのです。

これは、宗教だといって固定化してある現代のやり方は、なんとも妙なものですし、国家の岐路としてあるべきすがたになつてほしいものです。

御言葉の力にありし法則と君の御旨のいとぞ尊し

蔓延る、粗悪、ソフトウェア

宗教的ものの言葉のなかには法がある。悪い例えではあるが、言葉というのはコンピュータの中を走るプログラムに似ている。

人間という彼がいたとして、彼に対して何らかの言葉を伝える。彼はそれを受信する。

そして、自分の経験や知識、状況など総合的に考える訳であります。とるにたらない日常の会話ならば、右から左に言葉は流れる。教室所で教官に、「こら、フレーキだ」といふ場合は、真剣だ。

言葉にも、環境や状況に措いて無数の状態がある。

言葉は、究極的には精神の構成、カタチと原理の中の宇宙であり、精神そのものともいえるほどの活用をする。

言葉から詩や文が生まれ、映像色彩がくわり、そして、動きになる。

言葉は神であり、神は言葉である、と言えるほどの活用が其処にはあります。

宗教というものも、今や神の上に記された賢者達の意識を学ぶ書物として活用できるところまで来た。

天竺まで、苦心惨穡、旅の末、人々に法の書物を届ける時代は終わった。本屋には世界中の賢者の意識世界が並び、壯観ですらある。

しかし、なにがなんだか全くわからなくなつてしまった。無数の真理とおぼしきものには出会つが、纏まりがまつたくない。

我こそはなんなり、こうである。ナントカの古代書、靈界大真理等々、幾千、幾万の文面があり、其れらしき事をいつている。現代にたいする警鐘、聖なる予言とつとつ、現実の社会がまるつきり混沌としているように、数多くの文面がその意識や法をいつている訳だ。此れでは

何を信じたものか分からなくなっています。

考えてみれば、私の認識ではこれは現実の勾玉なのではと思おうのです。そのなかには、比較的まともなものもあり、逆に極めていいことが書いてあるようでよく見極めると、自爆論だと結論できるものもあり、あるいは、ある歓喜に対する精神論や軟膏ハリのなもの。あるいは、リバンドが激しくて使用禁止の内容等々、多種多様であります。

ある宗教にはいつて目が覚めるほどに回復した、神の法だと信じる信者。しかし、実態は人を只食い物にしたり、あるいは激烈な洗脳の法を注ぎ込むことで、一時的に直ったと見せかける、なんてこともあるのです。

これは、強烈な薬物の投与のようなもので、逆にそのあとが恐いのです。さらに、投与している方は完全な真理で間違いのない効果があると其れに確信しているのですから、話が混乱するのは。

国家という機関は曲がりなりにも、一応、天皇家や歴史の流れにあり、逆走していてもやはりそれらの法は、危険な薬物に過ぎないのです。

しかし、現実にはそういう薬物を高度に押し進めているのは、今の自由主義国家でもあり、矛盾している訳です。

現在の国家の姿の魂というものは、そのような無数の宗教書物が勾玉となって、社会を立林させているような状態が国家であり、掴み所のないよう現代の姿なのではと思おうのです。

また、なにも宗教書ばかりが、人の心に共感し作用する魂の言葉ではありません。その言葉にも、善い物と悪い物があり、私は後者を誤謬であるとしております。この誤謬が精神体の汚染を引き起こし、強いては人の行動になり、結果、国家を、自然を、汚染しているものと考えています。

難しいようですが、例を挙げるならばそれは、無数であります。それは例えば、本に代表するものです。とくに根拠もなく好き勝手に書いた次元の低い作品や漫画等も、宗教的ソフトウエアに準じてなれるわけです。

仮に自然界の根拠を成す神示があったとするならば、その仕組みを如何に無視するかによって、成り立っているものが多いのです。また、枝わかれた端の端で活動する一つの会社の勾玉の本も漫画もあるでしょう。

端の端のそのまた端っこの物を偉大な教義として、活用している場合が多く、そのかなり曲がってしまったなかに、国家すらある場合があるのが現状なのでしょう。

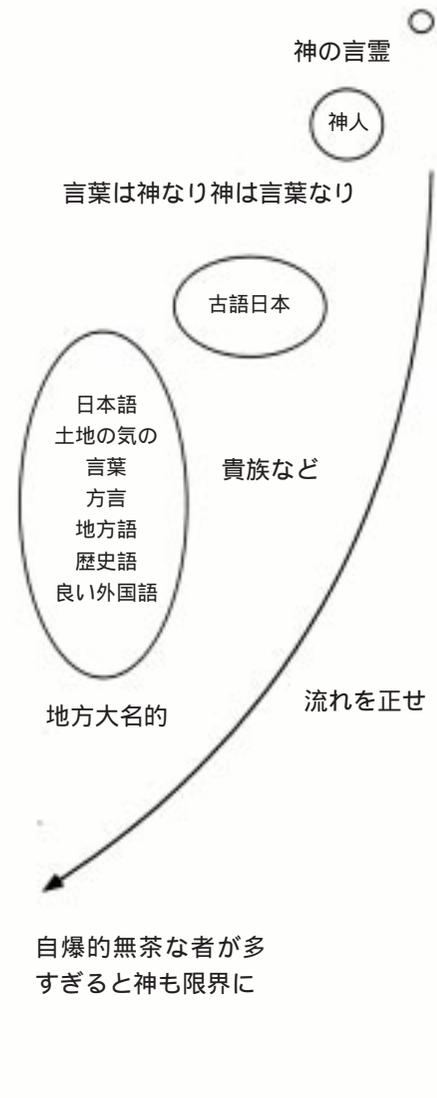
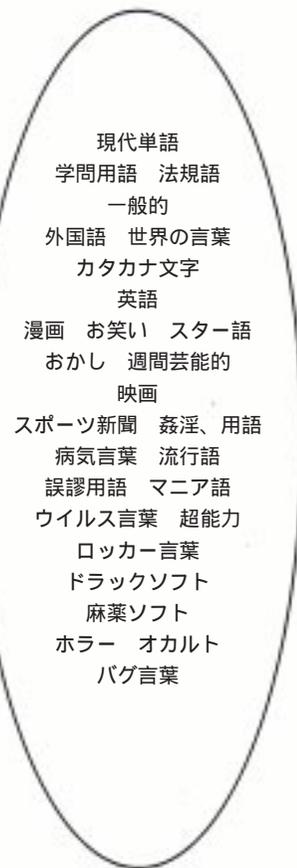
このように、正しい言葉の汚染、これは精神の汚染に類似しているのです。日本語の古語に比べ、現代は外来語などもあり様々に変形した言語を活用しております。日本の言葉は、文字的には外国の言葉より後に成形したのですが、魂的、霊的には、自然界の理法の説明にも懷疑的につかえるほど高度な神の言葉であり、外国に引けをとると感ずるのは間違いであり、特に、英語なる音になれきるのはマシン化していく手だてと違っていいでしゅ。

アメリカ人をヤンキーと形容したのは、どんびしゃり。日本では、中学、高校、手がつけられない奴をヤンキーと自然と発してしまいが、そんなのをいつまでスゲーとか拜んで、一緒にロックをやるからオカシクなってしまうのですし、アメリカ主導、自由政権構想なるものでまともによっけていけるはずないのです。

ソフトにも善しと悪しきがありにけり

最後の円は、細分化できなかった。良い物が上にある。ちなみに、この文章は一般的なもので真理はあるが、文面的にはよくないと思う。

コンビニ的
雑誌的
纏まらない
不具合発生
キレテイル
コエダメ
ゴミ多し



麻薬について

この世界には毒がある。それは、一見人間の基準が毒であるという判定をしいといわれればそうのだが、なにしろ、人が生きる上にはその毒をまず回避する方法、そして利用する方法、こういう事を学ばなければならぬ。

これは、シャーマンである。原住民の生活にも毒の花、毒の実があった。物知りの達人は、やってはならぬことをふまえるし、また、その活用にもたけている。生きるための知識を身につけ、時に心身の不具合を自ら直すこともある。

地球的に善悪、善について考えると、その驚くべき仕組みに圧倒される。例えば、原始、地球にあった生命たちにとっては、酸素は、廃棄物である猛毒であった。やがて、その毒を活用するものがあらわれて、その者達は急速に広がり勢力を拡大していった。そしてその拡大は、元々いた原始生命たちの領分を奪い、繁栄していった。こうして後に下がる所を失うまでになった。原始生命派だったが、あるときその酸素爆発族を上手く使うことに成功する者が現れた。こうして酸素爆発族は、只、単純な動きをするものになってしまったような。其処に共生の原理が和し、新しい生命のたびが始まったような。35億年も前の話だのような。

今の世界では酸素は、毒だという人はいない。そもそも、空気が無ければ死んでしまう。善も悪にかわり、悪も善にかわる。こんな不思議な側面も命の仕組み、いや、人生も心もそうなのであると思う。只、悪として、悪なのはそういう事は、知らないという所に神と善の原点があると思う。

善悪の時間的流れも重要と思う。こうして深淵な知識を持つ者は、理として理の座になければならない。強いていえば、それを逆立ちにするのが悪なのであると思う。

だが、世の中では、そういうものは馬鹿のようにもみえ、みすばらしいものかもしれない。そのものの内面的なかが、たとえば、君として従うかという、魂にぎざまれた生き方の深さがあるのだろう。

これが毒だ、悪だ。これが善だ。薬だ、という判定の難しさは神でも困難であり、結果、魂の絶対値が古くないと得られるものではないし、さらに現実的、経験や年、あるいは今、目の前の環境を冷静に判断したものでなければならぬ。

昔は、やっぱりこのバランスの取れたものが上のほうにいたと思う。いや、いまもそうでなければならぬのだ。お金を大だるに例えると、そのチカラのみで上がった者たちは酸素爆発族に等しい。

そういえば、最近話題になっている「活性酸素」。病気の原因の多くに影響しているらしい。酸素を多量に使うものなんでしょう。工場、スポーツ、焼き肉、スピード？

工場は確かに農業に比べ儲かる。いまは、儲かれば善いという価値観のみになった。爆発的に増えはするものの全体義としては混沌であり、これではガンになって自滅するおそれがある。スピードの追求というものはかなり危険な原理なのだ。わかり易いのは車で、速いほど危ないのは誰でもわかる。

経済追及のみの世界は、スピードを只管に挙げていることに気がつきたい。此れは食べ物とも相応する。カアサンオヤスミ、メニユウは、速いのだ。

ファーストフード、此れも早い。速さへの憧れは麻薬的要素を多分に含む。

小説やテレビドラマ。最近のものは大抵、人が死ぬ設定が多い。此れも実は速い歓喜だ。

スピードという名前の麻薬があるそうだ。ドンピシャリ。そんな名前の映画もあった。主人公はいなかの農夫ではない。生死ギリギリの高速男だ。

霊的な意味合いでは、まったくの繋がりを示しているのだが、世の人は関係ないと思うわけだ。

もっと、直接的歓喜としては、姦淫を繰り返す生き方歓喜、これが、これにあたるこの真理を上げると多くの長老も沈没する。

工口本の数ほど食材も職もある。悪い言い方だが、この際はつきりさせた方がよい(要素から必要数も存在するが、どう考えてもおかしいのは語るべくもない)。

現代の女性化の社会、真理の貫徹が上文のような物になっている。此れを知らずに政治もなにもないのだ。

関わっていないものは、皆無なのであって、結局、では今をどのようにたわめて、精神的な社会をつくってゆか、そこに焦点を絞りたい。

油絵は、多色の色彩を使う。日本も艶やかな色彩があったが、なるべく神は透明でなくてはならない。神は清きまし水のときであり、食へ漁りの都会の河川にならなくてはならないのだ。

「ビールもっていい」。飲んで捨てる、飲んで捨てる。こつこつ社会風潮を会社で行い、子供の注意しようと思えるのがおかしいのだ。神を失った親が子供に注意出来ないのは道理だ。会社の幻想を夢のあとするのは、もはや許されない。そのような島には、住むことは出来ない。それが判ったからです。

しかし、これからを考えるとどうなるのでしょうか。アイヌやアフリカ人を原始生命とすると都市的ものらは、爆発酸素族なのでしょうか。

あるいは、有毒なものらは無害なものに変えていくことができるのでしょうか。

あたらしい共生関係。そのような道があるとしたら、また違った結果になってゆくでしょうか。毒は、薬になり、薬毒になる。悪も、善も、友にさかゆ。そんなバカナ、そうでしょうか。私は、個人的にはそうでしょうか。かけてみたいと思うのです。白黒混ざって、灰色。この常識を破る何かが欲しいところです。

灰色を光に変える法則と神の御業に共に栄ゆる

自然とは何か

自然というと森や山、川を思い浮かべるのが普通だろう。世の中、人々も神様もそういう認識であることが多い。しかし、その定義の不確定さに驚かされる。これは私個人の見解では、精神的追求の怠惰の結果生まれた発想だと思う。

地球にとって究極の自然とは、星々の運行が定まり、原始の地球は火の玉の生命の存在しない。空気がならない星だった。当初は、それが自然のすべてだったのだ。

原始の雲は渦巻き、雷は天を走り、やがて生命と海が現れ、冷えた地球にはようやく原始生

命たちの揺りかごである姿になった。其れがその時の自然だった。

時を経て、生命の揺りかごであった原始海から、生き物たちは陸に挑んだ。やがて緑は生い茂り、大きな動物たちの住む環境が整った。例えば恐竜の時代は其れが自然であり、そのあとには、哺乳類の時代を迎え現代へと姿を変えてきた。

冷静に深く考えると、自然というものは驚くべき変化を遂げている。無機質の石ころすら自然であり、恐竜の雄叫びも自然だったのだ。

自然はその時々に変えて、その時代をつくり流れてきた。現代では、人のやっていることをそれは人口のものであるという。わたしは、この観念には大きな落とし穴があると思う。最近では、人の環境破壊から一部の文化人やエコロジストは、自然といいながら、結局、文化的生活にひたっていたりする。これもやむなしといったところか？

自然という要因を決定している概念は、一体何なのか。その問いに対して、一部の自然保護団体の唱えるような、あるいは一部の自然は神と承認している。神の概念が地球の歴史を振り返った時に、その原理が真実に対し対応出来ないものである。だから、科学と宗教は平行線をたどってしまうのだと、私は考える。

むしろ、神々の自然に対する安易な考えや認識、理解が環境を破壊する。勾玉のプログラムとして走っていると私はにらんでいる。

均衡、バランスともいい、すべての物事は均衡の上に、和を描き、永遠性と命を保っている。しかし、それを保つには、高度な理が必要だと思ふ。それは学問や人知的な理ではなく、もっと深いものであると思ふ。その深さを知らない神は、中途半端なことをいう。それが、世を濁してはいしまいかと私は思ふのです。

神の倫理の流れには、理の流れがあり、この流れが正しい方向だと自然であり、神の命の方向にあるものと思ふ。逆に何所かでその理が途切れたり、逆さまだったりすると、滅びの方向に進路をとり自爆行為を歓喜としまふような、気がするのです。

自然という物を敢えて定義するのは、困難ではありますが、幾つかの要因についてあげてみたいと思います。

現実界に蔓延する誤謬としては、人は云々、人何とか、悪説を批判的、傍観者として語るのを良く見る。こういう発想の類は万とある。私はこの発想こそ誤謬発生プログラムだと思ふ。これほど、無責任な言葉もめずらしい。人間という言葉で現実の罪をこまかして、なすりつけているのと同じであり、よく学識者、神々が使う。この認識はまったく浅すぎる意識であり、こういった認識が世の中の誤謬の発生におおいに荷担している事実を知らないのである。

日本では、古来、月や太陽も意識があり、神の本体であり、人の姿の神がいた。神は意識のフォームを、人のカタチとして地上にそれぞれに暮らしているのだから、現実界の人々こそ現実を良くする事の出来る唯一の本人なのであり、そういった自然界と神人のつながりという自然な理法の真理認識をいつのまにか破壊してしまつたのです。

結果として神の理は途絶え、さらなる結果として、生命の統治としての政治はなくなり、自然を破壊して物品を得るものが理の上を支配するようになったのです。

こういう場合、次元の低い倫理のものが上にいつてしまふという逆走がおこるのであり現実には、大衆と多数決選挙となり、そういう悪い原理の神ばかりが固まって、世の中を動かすようになって、病気だらけにしているのが今なのであります。

外面的倫理、おもに記憶や学問の常識や社会的なりゆき、あるいは現代風という幻想と各夢、

もしくは物品金銭のみの意識で物ごとが動いているのですから、たまったものではないのです。

これには、宗教的、誤謬が多いにからんでいると思われるのです。多くの人々は、社会の意識の中で、それら外国の神や、聖者聖典は何ら悪さをしていない、聖なるも尊い教えとがんばるのであります。たしかに、それはそれでいいのです。しかし、日本がそれを拝んだとき、それが問題なのです。多くの品々が外国から来るように、確かにそれは素晴らしいものなのですが、それは品々であるという認識を捨てて浸りきると、此処に逆立ちが成立する公式がなるわけなのです。

素晴らしく参考になる教えは多く、そのマスターに習わないと難関を超えることができない局面もありますが、ここに関係がなりたつのです。しかし、日本が日本を捨ててはならないのです。今の日本は外国から無作為に取り入れたものに潰れそうになっているのです。

よく、考えてみてください。聖なる教えの概念がなぜ現実に効力を成さないのか？ よく言うには、人々はそれを無視したといいますが本当でしょうか？

本当は、その考え方が間違っているのではと、私は思うのです。それどころか、更にいわせて頂ければ、それは誤謬に一役かっていること。

良い参考書や、素晴らしい部品が転がっていても、それは参考にしかならないものであり、高性能の部品なのです。日本はそれを組み立てることができるその立場にあるのに、只管それに没頭するのは、学歴社会にも似ているのです。経済優先論、あるいは物資主義もこの辺に隠れた因子をもっているのです。またこの原因となっている因子としては、外国の神話や、聖典、経文などであり、これらが、高いレベルでいえば高度の参考書であるのです。

地球の運行や軌道をとっている原理は圧倒的に大きく各宗教というのは、それにぶら下がっていた。高度なソフトの一本に過ぎない。個人的にはそんな気がしてならないのです。その古代の深淵な原理は、全く忘れ去れている。そして、現代では只でさえ外国のソフトを、時代とともに大きく変形させ、勝手に解釈したものを、偉大だとしているためにトンでしまった人達が多いのでしよう。

神の理の順が途切れると、このようになるのであり、自然というものは、神の理の順をもつて、初めて安定する命であると思つのです。

完全でない真理は、時とともに変形してしまふ。始めは、各国の場所の意識を保つ真理も、戦いや統治に利用され、幾多の協会と人口増大により誤謬化されてしまふ。

では、完全な真理とはなんでしょう。まあ、そんな物はないと思いますが、個人的には、これは軟膏バリより効き目のあると思っております。

自然とは神の流れの中にあり流れなば人口もまた自然なり

自然を考える調和と均衡

さてさて現実に描いて、例えば、政治家、ドヤワシノトロロデヤツタカと企業と金を武器に

動く行動の内意を分析すれば、ブルドーザーに、ガソリンタップリあるという環境と、心理的には同じことなのであり、今の人々の誠と勘違いする精神が倫理が一番うえて大活躍しているのではないのでしょうか。

さて、地上では石達があり、意思があった。冗談でもなんでもなく石は、意思ともいえます。意思にも色々あり、それは地球にある命のカタチだった。

世にあるものは、精神的、倫理があり、理あって、それら例えばトラックが動いていればトラックの神がいるのであり、それは無論、人物として意思としてあげられるのです。

太陽、地球、月、はるか大昔、漂う星は意味のある命のフォームを持っていた。というより命のカタチが宇宙にあり、家族的意識もあった。

三つの力には定義の方向があり、これを失うと調和を失い生きた歓喜の意味を失う。

木である。緑はやがて大地を覆い、石を隠した。森はそだった。そして、動く者達が現れ、動きまわった。そして、動く者達は石を拝んだ。

現代人は、人間は人間であり、学術的検知からいうと生命の進化が、とくる。その精神体形が自然の理の破壊をうながすものであります。

意思というものは、何か精神であるならば、学者が意思であると、こうなるのが市民的現代なのだが、そうではないのだ。学士は、今、大いに悪さをしている。君主があつて、大老、老中、その他、金、銀、学士はかなり下だ。君主は、ドンブリ勘定の振る舞いをするものがおおい。人民のノンベも、ドンブリ勘定をよくやるが、同じではないのだ。此れを同じようにしていったのが、現代社会的常識の数々なわけだ。

現代の人々は、木を切るはブルドーザーで何だろうが破壊してしまうは自然の中に、神の宿りを感じるなんていう、感性はまったく無い訳だ。例えば御神木とか御神石とか、奉っていた時代のほうが、精神的、正当性があるのだ。

億万の星を浮かべる銀河もまた、等しくフォームをもっている事でしょう。あつてなきかごとき力は、一定の方位と倫理のカタチで、おおくの時の中をすこしているのでしょう。これも神の命なのであり、自然のカタチなのです。

自然というものは学者のモノサシでは測れないのです。表の測定を完了したにすぎないのであります。

そういうことの判らない神が、そういう論理で、世を動かす立場にいるのも自然破壊の原因といえるのです。

心無き機械で動く世界とは今現実にあります

人間と自然という考えが、誤謬の原因なことについて

日本の神話では、神は島を生んだ。神は島であったが、同時に人格化した人物としての姿をもっていた。

自然は神の身体であり、神の働きである。その神は人格化した彼だから彼の上になりたつて
いると、自然に対し起こる慈しみと、もったいないという心は、同時に自分の身体をまもる行
為でもあった。

木々には、人の前の霊が宿り、石一つにも因縁があり神の大昔の自分の姿でもあり、魂の帰
る母体であった。

人々が増え、神の間に姦淫や不倫などの岩戸が増え競争がおこるたびに、真理の倫理は濁り
また、姦淫、多数の人口は多数の力で暴走することとなる。

かくて、なんだか解らなくなってしまったのである。多数と化した人民は、多数悪の原理か
ら良くない、外国の良くない真理を崇拜してしまった。諸々の文明も科学も学問も姿は違うが、
社会の意識、いわば精神という観念、意識だからであり、言っては悪いがプログラム同様の作
用をしているのだ。

外国の真理は人間と自然という観念を生みだし、その考えは精神の上で途方もない誤謬を増
大させる結果となってしまった。

自然と人という観念は確かに難しい。このさい、結論から先行し、考えた方が良いと思われ
る。

五十億の人が暮らす。彼らは勿論人間であり、それには相違はない。確実に人間なのだ。し
かし、自然と人というテーマで、正解を得ているものは皆無に等しいのだ。これを平等にあつ
かつてはならないと思う。

自然の云々というレベルに思考を合わせるのであれば、人と呼ぶ人物のなかでも、まず、島
にあたる神その人を見つめる努力が必要だ。太陽の神、月の神、人と人との世の中では何でも人
にせいにする。しかし、その言い回しのレベルでは、おそらく、大銀河というフォームをもつ
た神でも探さないと、責任転嫁出来ないと思う。

ここに巨大な誤謬の発生源が存在するのだ。人間と自然という安易な思考が、そもそも、そ
の先の精神すべてにエラーを起こして分からなくしてしまうのです。

仮に政治家は、銀河のフォームと同等の生き方の神人、呼んで倫理を尋ねた訳でもなく、ま
た、それに準じた神に伺いをたてた訳でもないのだ。

人は確かに人だ。しかし、誰が正統、順位の子神であったかは、現代では伺いようもないのだ。
倫理は、神の理法の流れにある。その命の理法が途絶えて暴走した。社会は混沌として危険な
地帯にはいつてしまうのだ。

神を見分けるには、最終的には倫理とフォームを見るしかない。いい加減な偽者は、いくら
でもいるのであり、力も光もある神もいる。その辺が難しい訳だ。知と理は、その人の学んだ
法を示す。そのフォームは、生活にもある。しかし、それがインデアンやアフリカのものだつ
たら、どうしたものかと思うが、真の勾玉は、日本だ。悪を善にたわめ、光にすることもでき
るはずだ。

人はとていい責任のがすが自然破壊

間違った理解、誤謬について

森を破壊し、人と神との争いがあり、云々よくある自然を見た感想であり心情であらう。

ここから、様々な解釈が生まれ、現実の悲観性に浸るものが多い。しかし、これは間違った理解なのである。

現実的に環境汚染が進み、会社は毒をだしつづけている。確かにそうではある。しかし自然と人という理解にあり、敢えて分け隔てを強調した考えでは、実は逃避に過ぎない。そこからは誤謬しか生じない。

もっと、次元の高い真理がこの世のベースになっていて、それが、見えないますすんでしまっている。神とて、また神があり、この倫理の流れに、逆や、つまりを生じてしまえば、世界は自然と暴走にいたり終焉を迎える。

地球の歴史は自然と人という、悲観論で通るようなものではないと思う。透明で、ダイナミック、力がはたらいている。それが、悪であれ、善であれ、未知の真理がある。

魂の前進は、幾億年もの流れをも組む。遠くは、木々や石たち、星もまた生きているのだ。

恐竜の姿をした時代もあれば、石としてある、自分もある。その歴史をしるものは、神であり、今ならば、人として、その神と諸人の違いは倫理や理性して、神の如何を勝負できるのだ。倫理や理性というと、科学者や博学者が浮かぶだろう。しかし、彼らの理性は、一般の現代、社会的ななかでは、理性的と認識されているが、はたして、どうなのでしょう。科学開発を進める学者より、そんなことはすべきではないという頑固者の意識のフォームがそれを上回っている。神であることに気が付かないものなのです。

学者は、石をみても成分を分析して、ナントカ岩と命名したりする。インデアンの先人のなかには、その石の意思は如何であると語ることもできたし、過去の自分であり、動きはしないが、神であり、守り石であるというものもいるのだ。どちらが、外側の機械人口かを見きわめるのは、こういう判断を、本来しなければならぬのだ。

過去、恐竜の時代も、原因となる生命が、ないがしろにされたため、結果として破壊したのはあると思う。しかし、再生の意思は、このくらいでは浅さもあつた。へこたれない。何しろ、昔は、星や石だったのだから。

だから、人間と自然では、その対比のなかで本当の真理をひっくりかえす結果となる。だから、幾ら話をといても、大本に誤謬があると、その先は混沌とってしまうのである。

霊が懸かることについて

人の肉体には、基本的に本人の意思である霊の体があり、それはあの世での体であります。

霊と物質は、結局、宇宙的に充滿していて、あらゆるものにありそうです。更に、その霊というものにも、我々が日常をおくる物質を岩石ぐらゐの大きさとすると、ボール位のものから砂粒ぐらゐのもの、あるいは空気にように充滿しているのかもしれない。物質界では、測定器を駆使しても、感知不能であるという原理にあつて、しまつていてと考えられます。

私も経験上、散々、様々な霊にとり悩まされ、此れが一番シンドイものだった。また、くっついていた霊に驚いたものなのですが、彼らは、様々な所に取り付くことが可能であったり、他の場所に移動したり、距離の離れているものが現れたりしているのを見ると、霊界の霊界、つまり、粒子に発覚不能な原理にあり後盾の世界が物質と霊界という一層ではなく、まだあるのではと思うところがあります。

夜、眠りにつくくと、夢の中を抜けて霊界にいつてしまうのです。所謂、幽体離脱というやつです。それで、いろんな神や霊とこたえたが有り、確信を得るまで大変だったものです。

その遙かに、浄化された意識の世界をあの世といたり、霊界としているのが、一般的な宗教的解釈の世界の構造なのでしょう。

こうなると、超能力的物になりがちですが、私は其れを否定します。何故ならば、全てのものには、順序と決まりがあるからなのです。宇宙的秩序と順番は、超能力的なものや、時間軸の云々を完全に有り得ないという構成におさめてあるからだと思うのです。

霊がついて、重いつか具合が悪いという感覚は、本人の霊に作用するためで、大きく感じるのです。宇宙が、遙かに細かい粒子のようなものが、転換したとき、現世があるとすると、今の時のなかでは、その状態は、存在しえないから霊が肉体人に反応しても超能力のような都合の良いものはなく、そういうのは漫画、映画、アニメ等のものであり、アイヌの長老が、天地を崇拜する儀式と同じとはならないのです。

霊界はあるが、見えぬ事ゆえに間違った解釈が書いた本のように、自由に世に広まるのが可能であるという危険な点があるのです。

霊的に低い霊ほど、つまり、誤謬を承認する行為を繰り返そうとする訳であり、世の中にある如何にも、低レベルな諸団体、諸子、オカルト、UFO、超能力、とものものは、原理の極めて低いものであることが殆どでしょう。誤謬を愛するということかなり間違った原理を、崇拜するという厄介なものです。

こんなのなら日本の神話を編成した皇族の方が、何所をとっても霊的であり、違いないのです。

諸宗教を逆よみすると、そういう勾玉となる。原理があるからこそ、現代文明的ではないかと思うのです。

その意味では、中世、ヨーロッパのオカルト主義や、闇結社、あるいは、小説、漫画なども時代の誤謬ソフトウェアとなりうるものであると、言える訳なのであります。

本道が解つていけば、人としての道と、生の方向が判るのですが、外国の宗教的ものをパロディにしているような現代の形式では、国家の道の設定の方位が間違っていると気が付かず、政治論を演じて、何の効果もないのは、明白なのであります。

このように、結局、見えない霊に関する誤謬の認識が世に膨大になり、その誤謬に実生活がまかれ、逆に、その他の多くの人は霊的誤謬の勾玉の危険を察して、それを放棄して、結果、事実の発見を放棄し、社会では物的誤謬につかえているというストレス状態があるのです。こんなことができるのは、生きるという本道や時間という真理が気が付かないうちに効いているからなのであります。

霊という認識では、本人その人、それがよろしいのであり、霊が来て喋ったとか、拜んだら来たというのは、まず疑うことです。

ネギ、霊媒者など、自分に霊が懸かり、喋るといふのは、一番低いクラスのやり方であるこ

とが多いのです。

霊は相手の思考を考えを読むのでもできますし、うそを吹き込んだり、意味不明な思いや苦しみを掻き立てたりすることも可能です。

また、夜の意識のなかでは、夢は霊界に通じているのですが、変な霊につかされると、要でもないことを表示したり、変な行為をときつけようとすると霊などが極めて多く、全くの安眠妨害であるということもあるのです。

霊だからといって、高度なるものと思うのも、全くの間違いであり、肉体にやどった霊体の合致した誠の人の判断のほうが、レベル的には高い場合もあります。とくに物質界での、行動は基本的に私たちを媒介するのですから、無茶苦茶なことをしようとすると霊は、説得したほうがよいですし、改心させたり、近づけないとしたり、まあ、このへんはかわると大変です。そして、現実の使命此れを遂行するのは、最も大切なことで、ここを突破するのが、難局です。結局頼れるものは、師であり、また自身の耐え鍛えしかないようです。つまり、現実の本人が戦うのです。

基本的には、生きていたときより、霊は賢くはないのが普通です。形式を超えて、遙か彼方の霊界にいつてしまった霊は、そもそもその、原理を伝えるのは不可能で、結果としての大自然や宇宙にあり、結局自然を大切にしようとか、土と共にといった精神原理こそ尊ぶべきものなのです。

結局、先祖を奉るのは、よし、なるべく正攻法無神への信仰は、よし、霊界とかに深入り、危険、現実の実生活の普通の人よし、その人の態度、人柄、師、学びにあるもの。拜んでもよし、また、自然界や遠くの星にそこにわが心、帰還する礎あり、そのころ、帰る所あります。

現実を生きるは本人これぞ大切

霊は思考体でありフォームであることについて

非常に迷惑を来したのだが、私には何人かの霊が取り付いてしまった。睡眠の意識を超えて、己の霊が霊の世界にはいると、日頃取り悩まず霊にあったりする。肉体をはなれて、観念の世界に入ると分離するのであり、そつしたことにより日ごろとりなやまず霊にあつのであつた。

人でも、動物でも、何らかの霊があるのであり、霊のないものはいないのだから。そもそも霊というものは、物質界には無関係にあるのではなく、物質界との写しで、関係則があると思う。一般に何とか界とか定義があるが、ここでは敢えてしない。

宇宙には見える世界よりも、遙かに膨大な霊のようなものがあり、その法則性の中から、太陽が昇る朝日に形容するように宇宙も誕生したのではと推測される。

霊は確かに人体に解る程に干渉してくることがある。おそらく、物質の世界は極端にというと、原子はその大きさをもっても岩石のように大きく、霊というものは流れる水のように、細かく、その細密な世界は推測される。

霊が干渉してきて、奇跡の業をみせたり、人体に影響を与えたということはよく聞く。確かに岩石も水量が多ければ、動かせない事もないだろう。しかし、これには大変な盲点がある。多分推測なのだが、これは時間や状態の変化、順番というものを無視する、言わば、誤謬の結果なのであり、あつてはならないことらしい。

つまり、それは宇宙的時間や法から、分離した無法行為であり、誤謬であるといえる。実際、奇跡を求める者達というものは、非常に誤謬を抱えていることが多い。

さらに、私の体験からいえば、ラップ音をたてたり話しかけてきたりする霊がいるが、全くのデタラメ霊が多いのだ。奇跡を起こす霊や神というものは、レベルが低いのであって、誤謬からそれを行おうとすることが多く全く信用できないといっている。

ここには、病やある一種の能力にたける物が多い。霊というものは、思いでもあり、思考でもある側面がある。例えば、ロックや財テクを意識のフォームを愛した霊がいるとする。そういう、霊がくっ付くと、その地上人は知らないうちに、意識に影響をうけて、それがその人の好みになり、フォームになってしまふ場合がある。

本人の霊体を、無視して違う霊、意識、フォームが取り付いてしまふのだから、下手をする、正常な観念の持ち主も、自分の意識を崩したり、また、病の歎きの霊だと、心身の破壊を企てることもある訳だ。

とくに、霊たちは取り付いていると、人間として自分が、行動しているときには、害を与えてこないのだが、その本人が霊と違う意思だと危害を加えてくる場合が多い。

これらのことは、そもそも強制をもつために、禁止させているのだが、結局病の倫理の理法のフォーム霊だと、そういう説得が効かないのであり、困ったものなのだ。そうなる、逆に地上から説得して、改心させることもある。此れを徐霊とか心が変わると、世間では言っているものと思う。

実際、悪魔だと思う霊も、苦難、苦闘のすえ、天使になったりする。これは人の社会と同じなのです。悪に強きは、善にもというのは、霊界でも現実でもありうるのです。

また、この世紀末には、余りに誤謬を抱く霊が多いのだ。地上が誤謬でまわっているために霊界の霊の意識も間違った見解や地上のことしか、把握しない霊も多い。霊の世界にいっても、経済がとか、アニメの何とかちゃんとか、テレビの環境と完全一緒で、アウトだったのだ。また、科学学問の誤謬も蔓延し、霊界でも下の方は全く地上と一緒にであり、霊は、成仏せずに生きていくとドッカ二つしてしまふこともおおい。

最も、霊の世界の認識とフォームが狂ったから、それに類似した地上があるのであり、その点を考察すれば、認識の過ちは現実、霊界ともになって、発生しているとは仮定できると思う。

一般的には、科学や学問の理法は、人のものであるという認識があるが、そうではない。霊界にも、同様のものがあるのだ。意識世界とは、反したものをいう。一般的な見解は、むしろそれが誤謬だ。私は、科学的な追求は結局は、真理の証をするだけの材料なのであるという確信から探求にはいったので、昔の教典を書いたものらの、自然観と霊界でスイブンもめたものだ。

霊界追及者や宗教的道理とも、相違をみせ、科学者や学者、哲学者、世の知者の見解とも、全く違うものだった。現実、霊界ともに、孤立したが、しつこく粘るうちに、理解者もあらわされた。

このようなために、私の元に来て妨害を企てた霊は数しれないのであった。彼らの意思の思

考と異なるためにそれはおこったのです。

意識というものは、言葉の中にあり、その言葉によって人や霊の動きも変更されてしまう威力があるためなのです。霊の世界は、とくに、言葉の影響を受けやすく、言葉は大切なのです。例えば、霊が取り付いたと直感したら、言葉で霊界へ帰りなさい。自分の家に、家系の守護に戻りなさいと説得するのが一番なのです。それでも駄目なら、現実を説得して、一步を這うがごとく、あゆむしかないので。

霊は、言葉と思考に敏感で意識の動きを察知したりしますが、此方から説得することもできるのです。

お守りや、霊札、言霊などが効くのは、霊の思考にその言葉が巡ること、神の倫理を思い出したり、御神名から、その神の特性を感じたりするからなのです。また、文字や力タチの意味にも敏感だからです。

デタラメな霊たちの表示について

眠りの間、意識は霊の中に入っていく。意識の世界では、死人にも会ったり、現実に生きている生き霊ともあったりする。

例えば、身内のものや友人の霊とあったりするが、当の本人にもあってきくと、まったくほけている。狂ったことを言うなといわれる。こんなものなのだ。

人の霊は、意識の世界へ行き、その世界で何らかの動きをしても、そのことを記憶や起きた時点の意識に、概念をおろせないうために、なにもおこっていないとか不鮮明な状況において、正夢をみたとなるようです。

もっとも、意識の中に入ってしまうと、其処が意識の世界だと、気が付くことが出来ないのが主な原因であるとおもわれます。

死者の霊が、自分が死んだと分からないことがあるようで、全く、生きているとしか思いはしないものなのです。

霊界で会う霊も、お前と今、私は霊のなかで話し合っている、と理解にあるのは希なことなのです。こういう人は大昔は多かったらしいが……。

私のように、生きていて眠りのなかで霊界の意識にはいり、行動することを認識してしまつたものの、考え様によっては、タヌキ寝入りのナンモシランの方がよっぽど幸せなのでは、真理など、探求する必要のない未来を、半ば思っておりませう。

過去に、霊界の書物や神託をおろした者も、同様の環境に落ちた人物たちの遺産なのでしよう。

私は、霊界ではありきたりの人物にあり、理解もし、話をしても、その地上での当人の記憶の中には、その意識が残らないという認識を確認するまでは、混乱の連続であり、また、霊界での奇怪な行動についても、大いに理解を広げ、その因子を探ったのであります。

夢にしょっちゅう出てくる霊は、実は本人に取り付いている霊そのものということもありませう。

自分の霊界での行動も要注意です。自分の行動と思っても、実は干渉している、霊の思いで、そういう思いの注がれた空間があるだけのことです。テトラメナことがホトンドなのです。

目が覚めて、本人の肉体と霊が合致したときの判断力は、圧倒的に正しく、倫理的であり生きたものであり、信じるにたる、現実+霊界=解なのでレベルが高いのです。

いい加減な霊や神の言うことは、全く信用できないものです。この世の人を捕まえて相談するに等しく、また、過去の真理を記したものたちも、また、己の真理を説くものが多いのです。今回、逆に科学によって、地球の地理や方位が顕かであるたえに、逆に真理との対応が把握しやすく、その二つが重なることで、反論不能の項目がでてきたのです。それによって、過去の真理に固着するものも考えをかえざるうえなくなってしまう、結果として、誤謬を広めたと理解する方もおられました。

よつでもない人物、霊界（学校、会社、人物など）などを、召喚したり、妙な行動をとる自分に苦しんだり、これら、取り付き霊なのテトラメナだとわかるに苦労したものです。

始めは、彼らを驚きみたものの、結局は無倫理の妨害、暴走、霊にすぎず迷惑千万の真理を悟るのに苦労したものです。

現実の今を生きた人の判断というものは、極めてレベルが高く、それに比べて、霊界でのいきあたりバツタリの混乱した意識の思考は参考にするならぬ場合が多いのです。

地上をおろそかにして、霊界を説く者がいますが、ごつやら、それらは有害な倫理をまき、誤謬の種になっているようです。

奇跡無き所が誠の神なりけり

言葉の中に

真理は理法である。真理といっても近似知的な真理が真理の真相であり、各々の真理が大きな元の真理の上に枝葉のように、ぶら下がっていると考えると良い。結局、完全というものはないが、レベルが高いのではと思うというのが正解なのだろう。

宗教というものは、いってみれば生き方の手本、生きる法であり、今風に悪く言えば、コンピュータのプログラムと似ている。

喜びには色々なものがあり、その中には、その理が生きている。それは歓喜だ。缶ジュースならば、その倫理やそれにつく人々の歓喜社会があり、盆栽の趣味ならば、その倫理の意識の理法があり、人はそれを心とみたり、精神と呼んだりして、その定義は複雑なものである。また、年齢という極めて大きなファクターもある。

言葉というものは、プログラム、OSの根幹となっており、人々はそれを国の意識や人種といい、考えているものなのです。

言葉は神であり、神は言葉なのです。日本には日本語神があり、その根幹から様々なフォーラムがなっていたのです。その神の物語や生活が言葉となって、しるされているのです。いや、

歴史そのものと、いつて良いかもしれません。

古語で喋る日本人が、神宿る国であったように、国の魂は純粹さを保っていたのです。現代の神の国である、日本の言葉は漢字や外来語の山で、つきはぎだらけのハイブリッド状態であり、もはや面影のないものとなりつつあります。

ですから、現実には外国を崇拜するあまり、高融合化が進み、ハイテクなのです。この真理をよめばこうなるのです。

雑誌、新聞、外国語、漫画、とうとう、この氾濫こそ、誤謬の元といっていいでしょう。本道をしていけば、それも救われるのですが、本道をなくして、外国語に夢中になれば思わぬ結果となってしまいます。

ガンは、身体の円滑な言葉のフォームを破壊してしまいます。その原理には、その倫理で行動する者達や、その歡喜が存在するのです。そういうものも、改心させられるのですが、社会がそれで国や社会がロックで麻痺してはならないのです。

身体には、身体の理法があり、健康な言葉がある。その真理こそ、自然界や人の生きた調和フォームだった。しかし、身体には病氣やケガもあり、ガンなどの病も存在するのです。言葉は大切なものなのです。

身の回りに溢れたる教義にきずかぬ日々の生活

学術的立場からいえば

霊が云々といえ、ちょっとキテル人と避けるのが普通である。神的な靈的な書物も、大衆の中では同じ扱いにされてしまい、オカルトなどと同じ領域としてとらえる者達が多い。

私もよく霊にとり悩まされていて、くっつくなど、自分の家や先祖のところに帰れと怒ることがある。

一人でこのような動作作用をしていけば、彼は精神病であると判定がおこる。医学的な立場からいえば、取り付いている霊に注意している者を見れば、彼は何だと、なんとか病名をくっつけなくてはならないからだ。

病名は何とか症で絵やパターンをみせて、思考感覚の検査をしたり、対話から生活行動から意識の上で彼の幻想パターンを解析して、ケアすべき順路について、考察したりする訳だ。

現実的には、たしかに大体、妄想家の類はつじつまが合わないとか、突発的に切れたりとか、色々ある。しかし、それが100%間違っているかといえ、5%から1%くらいは、あつていたのであつて、その辺も完備した達人がいてほしいものだ。

霊にたずさわるものの大半は、確かに、誤謬におちているのは事実であり、無茶な者が多いのだ。

タヌキの霊など、大神の我なりとよく騙し、いい加減な指導や真理をまいたりするものもある。かくのごとき倫理を信じて、その思考のフォームの生活をすれば、悪化することはよくあ

る。

下手に真理を追うくらいなら、現実を一生懸命働いていたほうが、絶対的に正解であり、生きた安全なのです。多くのひとは、この道を選ぶ。しかし、この道はのり易いのだが、実は目標がないのだ。物が豊かでも、なんか違うのではというのは、「この辺にあるのでは」と思う。

この辺に、認識の難しさがあるのです。地上だけでは、正解を得ないし、霊界だけでもまた正しい、倫理はないのです。

化学では、測定不能の領域のオーダーになると、無いという認識がでてしまい、それが理解したという認識になってしまふのであり、それでは、筋が通らないのは、科学自体が証明しているのです。

こういつ、科学などの個の理法を抱えたまま、単独の研究が次々に進んで暴走してしまふ社会はそのもつともらしい倫理を鵜呑みにして、欲望を控えることなく開発に終始してしまい地球という大きな命を見ない様になってしまふのです。

あまりに、見落としが多いのです。病院と医師がこういつ精神の病では、称して通るもの、それは、民衆大衆という悪の中で発生した常識という大衆平均の中の倫理と社会的、生き方から推論した、大衆のエラー用の病院的学術見解にすぎない場合が多い（なかには、すばらしい助け船もあるが）。それは近代的な、社会状況、大衆自由的、アップルパイの中では、学位は華々しい地位と見え、大衆的バックアップによる金銭的地位にいて、最もらしくみえるかもというのが、本当の所なのであって、外面的擬似的正解の中にあるということなのです。

しかし、外面の現実で99%までいけるのであり、それをもって世の中だとするのをもまた、良しでもあり、しかし、本当の真理は残りの1%にあり、其方が本来主なのであります。

君よりも高きにある学士とは世の病の源なりけり

生まれ変わりを信じないというものの行動について

政治においても、環境問題の討議にしても、行き着くところは、精神の倫理、つまり考え方に依存する。

人の行動を支配する考え方は精神ともいえよう。宗教的だと定義して、現代の人々はそれを忌み嫌う。しかし、概念こそ生きるための理法のあり方をしめす重要な作業だ。

突き詰めるは霊とか、神という概念が出てきてしまい、そこで引くと結局は、水掛け論におちて、結局、お金の問題のみとなり、本質を護摩化して、政治と宗教が分離ということになる。

つまり、国家の運営や国のあり方を問うのに、神とか宗教的な意義定義を無視して、分離しても考えるところに根本的な間違いが存在する。

たとえば、そのもつとも良い例が、生まれ変わりの問題であろう。生まれ変わりと云えば現代において、公の場での発言とすれば、彼は気が狂っているか、思われるのが現実なのである。

しかし、この誤謬は、人間云々の誤謬に匹敵する誤謬であり、実は有害性の原理の蔓延の結

果をまねくことになる。

現実さえ良ければ、あとはどうでも良い。死んだら終わり。この情けない考えが、蔓延するかぎり人類も地球も明日はないだろう。

生まれ変わりを信じないものらは、大抵、現実の経済しか考えない。環境汚染しようが世界的な負の遺産がのころうが、死んだら終わりといって、逃げるのが可能になるのだ。

また、現世の名譽にかたよるものも、自己の研究と榮譽を追求すれば、世では通るといふ。学者なども、この手の考えを、心、脳のプログラムに焼きつけて行動するものが多い。

この物質界も原因があり、因子としての宇宙は宇宙の遙か前よりあり、所謂、無としよつとして、何も無いという粗悪なゼロに依存する学術的会社は、全く足りない不完全なものではないでしようか。

自然と共に生きたアイヌや、これで良いのかと日常に思いをけずらす心の持ち主の、心、精神のほつが、一段上の神であることに留意しなければならぬのだ。

感性や田舎の心と思う、中に在る、内面的、倫理、観念は都会のハイテク、学業の意識を、上回るものであり、其処にたどりつくためには、長い長い、時を刻み学ばなければ、習得出来ない長であるのです。

生まれ変わりを信じるものは、魂の刻んだ絶対値が、魂にあり、彼がなにをするものかは、彼の刻んだ守るべきのりじこがある。

生まれ変わりを信じないものは、一列一平に、学業的教育に倫理をゆだねるといふ怠慢を隠れて、演じることになる。これでは、結果的にストレスが溜まるにきまっている。

ピールのんで、サッカー見て、会社で働いていれば、それでよしという、原理不通が標準となり、世では場を利かせる勢力となる。

地球や自然界の歴史を刻んだ神々もいる。では、どこにいるか。それは周りを見ればよい。そういう、倫理の持ち主はその力をしめすのに倫理や知があり、それは現実界でも可能だからだ。

そもそも、人間といって、人間ばかりになったことも誤謬なのだ。自由民主主義なんていう悪力の限界に挑む行為は無理があるにきまっているのだ。

こちゃ混ぜの結果は、都会のこみ箱を埋め立て地を見れば良い。どうしようもない汚染が元をたどれば、精神的な考えの不通によって、引き起こされていることの筋が見えてくる。現代的、政治論が途方もなく根本的に間違っていて、説明の歯車が噛み合わない事実があるのです。

昇格について

不思議なもので、不思議なはなしです。

湖に住む、大蛇が修行へと禁戒を守ること幾千年か？ 彼はやがて、天の龍神になり龍神の世界へと昇格をはたした。

大蛇は何を守ったのだろう。動物たちを食ってしまう欲念か、或いは、取り付きの意識で邪悪な企てみを、試さないことだったのだろう。

彼は、彼の意思で自らに戒律を掛け、その掟を自らの目標とフォームとして、やがて、龍神へと昇格していったのだろうか？

不良のツツパリから、卒業して、ようやく、働く現場の監督が迎えに来たのでしょうか？
彼が、酒やバクチなどにはまらず、無事に仕事をこなせるようになり、願わくば、家庭をもち、安定した働きを獲たならば、ようやく、次のフォームへの階段が見えるか否かでありましよう。

世にある、すべての職種において、リーダー、現場監督、課長、工場長、部長、社長、会長を幾万通りこなして、一つの世界の倫理を理のフォームを学び、次のステップをあゆむのでしよう。

龍神は、また幾万年か、幾億年かその働くを学び。意思をみずからの倫理を理論をフォームカタチを固め、やがて、仙人に昇格すると聞く。

龍神のもっている玉とは、何か。龍は自在に巨大な動きをなす。玉という意味は動かない理法であり、龍神の神なわけだ。

ところで現代の国家の理法は、どうなんだろ。どう見ても倫理を欠いている。ゴミ問題にしても、風俗意識にしても、完全に混濁し、倫理を失っている。玉を持たなくなった龍は暴走をおこし、企業として、上にあがって偉くなってしまったのか？ 今の国家が果たして、企業に命令を下せるだろうか？ 危険な原理を見抜いて子供たちを守り、倫理的な教義を歩ませることが出来るであろうか？

実は、？マークを付けるまでもなく答えは出ている。現実という事実をみれば、多くをクドクドいう必要はない。

結局、どこかに倫理のいきずまりや、逆立ちがあると、無統治の暴走になることになる。

さて、仙人界の先はどうなるでしょうか？ 仙人の仙人、長老の大長老の超長老がいて、そうやっていくのでしょうか？

そうなのかも知れません。結局長い時間が過ぎれば、老いた没味があるのでしよう。

しかし、これは結構、ヨーロッパ的な考え方なのです。日本は、世界の勾玉であると私は思うのです。

勾玉というものは、元々、胎児のカタチなのであり、純粹さと元のフォームに意義があるといえるでしよう。

統治の玉は、無色透明。つまり、零、〇でなければならぬのでしよう。実は私は思うのですが、この純粋な玉は年齢を当てるのが難しいのではないかと思うのです。

仙人界の上に普通の人の様に見える人がいて、その上が、また仙人界の様に見える。こういう一つの波のような周期性は、どうやら存在し、見逃したり取り違ったりしてしまうことがあるらしいのです。間違った方向のその度に何らかの誤謬が発生してしまい、判断を難しくしている。

王の家には、学者や知識陣がいて、驚くべき程の本や知識があった。しかし、生まれて来た王子は、王子であって、学者ではないということにあります。

聖書や、聖典などでも、知者、賢者の集団がよってたかつてても、結局、巻き物を読む事は、不可能だったということもあるようです。

難しい数式の羅列も、法の教義も、純粋な玉のフォームを全く真似するに至らないという可能性が世にはあり、たとえば、会長も名譽の慾だけは、捨てる事ができず、固着してしまっ

とか、欲の大きさをまして、不安定になって自分をわすれてしまった社長とか、いるかもしれません。

世の中での、自分のフォームを見つけるのは人生の課題です。なかなか発見出来、ないものであり、こういう人が増えて様々な人がいれば、単純な判断は難しいのです。自分のフォームの発見は中々出来ないものです。幾ら、壮大でも、倫理的に変だと思うことはおかしいことが多く、じっくり観察すると理解がないということから、倫理のレベル的には低いと見えるのです。なんかおかしいなと思ったら、怪しいです。

世の中の逆立ちを直す困難のヒントは人の生き方かな

転落について

せつかくフォームと倫理をもって昇格した自身の生き方も、失うことがある。一番恐いのは欲望であり、色欲、姦淫よく、物質よく、名譽慾等々。支配と権威を手にする、何時の間にか改悪し、脱線してしまうことがある。

龍神も蛇に落つこち、仙人も、慾と我と利己に落ち、力をうしなう。こういう事は一体なぜ起こり、現実措置いて、どうしてこうなるのか？

神の方向性の間違いによる影響が大きいと私は推測しています。世界が逆さまなもの、なんかの倫理の詰まりや逆転が考えられるのです。

神から悪へは、善の方向に結ばれ、安定した倫理になるはず。しかし、実際は単独の倫理の崇拜で、例えば、一点を追求している会社が段々と神を忘れ、大きくなり、神を排除するまでになってしまうのです。

黙っていても、神は負けてしまいます。しかし、単独を追求する彼らが、如何に頑張っても、総合的な解において勝利を得る事が理論的には可能はずなのです。悪の中で追求され、磨かれた、悪のカタチは凄く参考にあることがあるからなのです。この場合は、毒の中から薬に使えるものを神が探して、総合力で変化させて使ったという場合なのです。

都会の現実を観察してみると、神的な意識は政治や生活倫理にないですから、この場合は、一方的に倫理が閉ざされて、逆立ちをしていると推測できるのです。

金と物の制御が利かないということとは、大衆の主導と意味を同意にして同じです。会社は、環境を意に化さず、物と経済を追い、自然という母体を何とかしようと考えないのも、会社という単一の倫理の集団が真の総合性においては、地球という倫理に、まったく、当てはまらないために、こうした結果となるのです。

人が車に100メートル走を挑んで勝てるのか？ 勝てないのは当然なのです。車と言う機械に置き換えれば、当たり前現象です。しかし、これを人物に置き換えるとスポーツ選手にその本体である、本人の人は勝てないということなのです。

例えば、森の動物たちの原因は、木であるかもしれないのです。動と静の関わりと魂の繋が

りがこの辺にあるのです。

機械を拜む行為は、なにも機械に限定した狭い意ではないのです。本体は、静かな理であり、総合性であることが多いのです。

元の教えは一つでも、三派になって、やがて、無数になって方々で教えを曲げた、利己の原理と戒律で良く分らない教義で争いをして戦争にまでなる。

自然の木や山、川でも拜んで育成に心を培った方がよっぽど良いというのは、真理であると思つのです。

木を切るにも、木を尊び、有り難いと思つた。畑の実りをみて、祈りを捧げた。これは自らの心を祝福し、祈る気持ちでもありません。

取るに足らぬと、インスタントロッカーを拜んで、たべのこしボーイでは、逆の方向に向かつているのを感じるべきなのです。逆に向かうことは、大きな生命から離れることであり危険行為なのです。

政治意思、国家意思の狂いという問題は、やっぱり見過ごせない問題であり、果たして如何なる倫理により国の運営をしていくのか、自由、平等、ボケてしまった神様程厄介なものはないかもしれません。

壮大な都会のビルも、利己の方向性を追求した結果伸びたのであり、ドンドン伸びるのかというと、限界があり、恐竜が倒れたようになってしまつ可能性もなくなはない。アメリカでは、そんな映画をよるこんでいるでしょう。神が、意地悪をしたのではなく、パワーチームの暴走。あるいは、間違つた真理を採用した結果、こうなつてしまつ訳であり、実に自然であるといわれてしまえば、自然かもしれないのですが、それは、間違つた解釈でもあるといえるでしょう。短命もあれば長寿もあり、若い世界故に、ロックをやっていたとも、いえ、また、成人も昇華もあるのです。

転落の原因には、様々な原因がありますが、姦淫の色情が最も大きな原因と言えるでしょう。諸外国の文明、製品をもつて拜み、喜んだ訳ですが、しかし姦淫の重なりから生まれた物質的な豊かさの幻影なわけなのです。違つた女性を連れてきて喜ぶ歓喜と似ていて。

マニア物も、結局エロ本やその他の怪しい業界の倫理からその毒気を発している訳なのです。姦淫を承認することは、夫婦愛や純粋性をなくしてしまひやすく、結局それが、宇宙的倫理に反駁した悪の方向に無倫理な方向に存在するために、美的フォームが欠損してくるのです。

都会の歓喜というのは、姦淫を承知した世界であり、法案で外面だけ装うにしてもさすがに無理の来る点があるのです。

現実的には利己への固着は、怪しい芸術などにも見られる。物とお金の世界は、結局、芸術的美観の判定を大衆意識と時代の雰囲気、学問の御膳をつけて判定するのが多くなつてしまつのです。

最近の子供達のゲームでも、ホラー物が流行つたりするが、良くない傾向にあるのは、社会全体の意思の狂いに依存していて、そうした精神の表れであると言えるのです。

芸能でもなんでも、姦淫やエロ本の話題が結果として社会意識として新聞や週刊誌、テレビなどを包み込む悪い言葉の発生になつていて、そのことを理解しなければならぬでしょう。

結局、こういふ状態に力があるのかというと、悪の原理というのは、結局、無論理に進んでいる訳であり、命という力から脱線した。あるいは離脱、自爆を試みる行為なのであり、力があるわけがないのです。

仙人は、偉大さに転落し、龍族は開発と儲けに酔いしれた。果たして、何所まで転落しているのだろう。宴会、接待、女呼べ。これでは、いくら子供たちに注意をしようができるわけがなく、その問題の争点すら全くとりちがう程に転落しているのである。

有り難い人のカタチを使っても、実際は、犬、猫よりも落っこちていることに気が付かないのであり、いよいよアリから出直さねばならない時が来たといえるでしょう。

こうして、神でも転落がおこり力の剥奪が存在するのです。倫理の流れを失ったり、また、蹴飛ばしたり省みる心を失ったりすると、ドンドン転落してアリから出直しになるわけなのです。

アリがたしア理の力は天の理なり

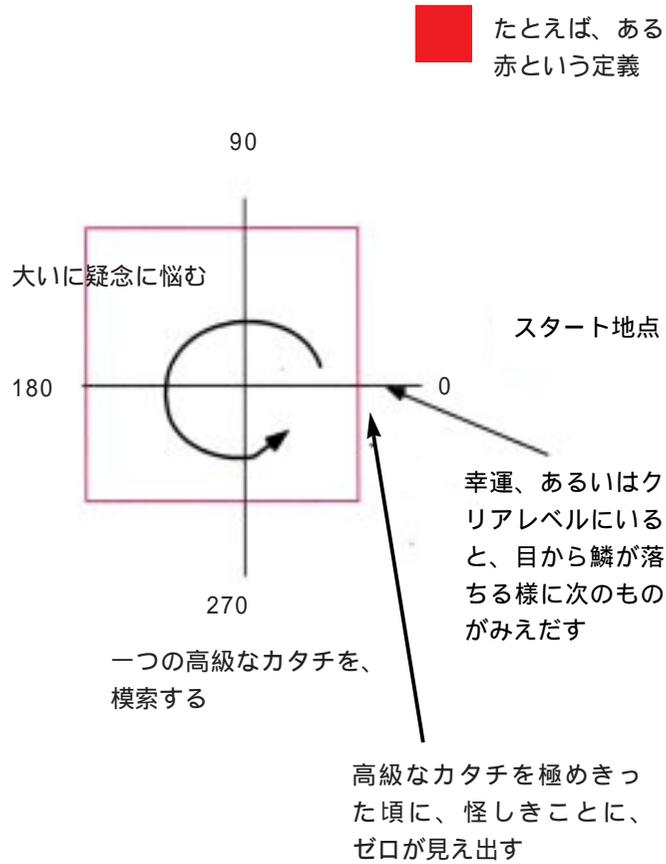
人生の回転

趣味など、何か始めるといろいろな道がある。道と名のつくものは極めの道のいかんの面白さ、苦しさ、喜び、悟り。これをもみ合いながら歩いていく。あるものは、こう語り、あるものは挫折したという。それでいいと思う。

ゴールや卒業は、いかにしてあるのだろうか。いやいや、そんなものはないという方も多いだろう。

スタートとゴールの狭間に極めてココロナル、という無、ゼロ、0がある。参考までに。

自分では最高と思う

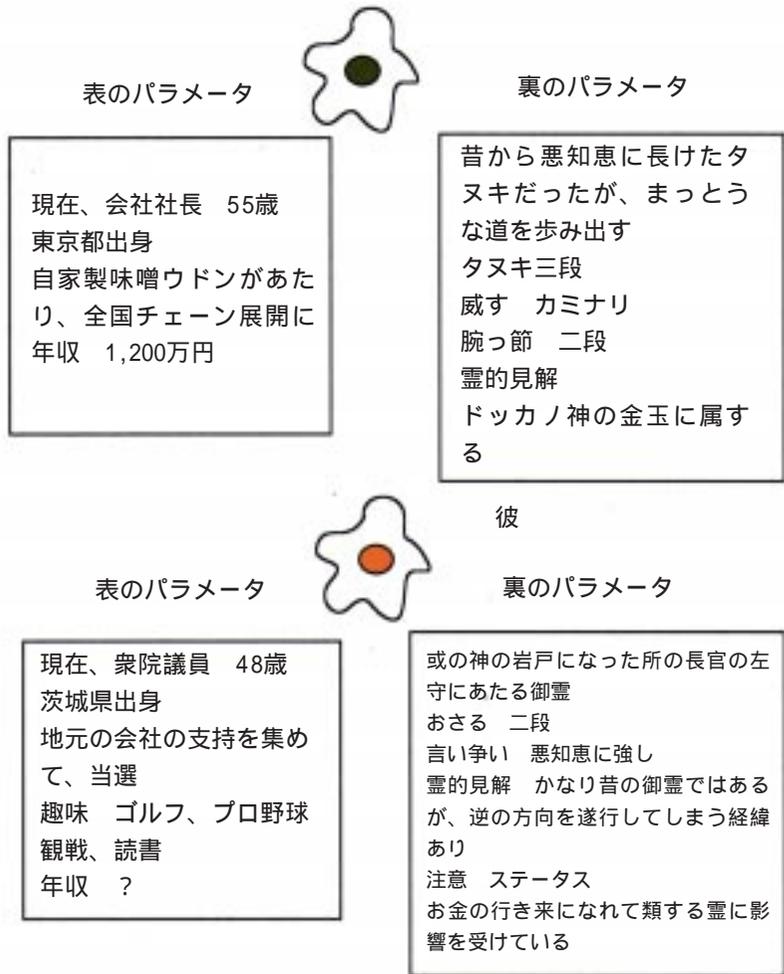


前項図は、単一な趣味性においてのなんらかのありがちなカタチである。人生では、この要素や他要素がかなりある。

刀を打つものは、それに弓をつくるものは同じくしてある仕事と自分のあるべき位置は、ストレス的環境を無視すれば(レベルは)、あるべき精神にてあるべきであり、暮らしぶりや収益、知名度などもある。趣味性として、実生活として、仕事と命の関わりは大きい。いや、本来は、使命感のみであるべきなのだろう。

人生において、極められる仕事は僅かであり、また、食という重要事項に引かれ裏腹に措かれる環境も多々である。

一度きりの人生ならば、空しくつゆの如くきえゆ、であるが、生まれ変わりを信じるものは違う。実際問題として、神の道は、霊、心を持ち、あるいは大地として生きるような道を歩むこともある。



裏のパラメータ

太陽神、天照の生宮としてあり、生涯の経緯をあゆむ
宮中 マスター
ミヤビ マスター

その他、多数の優良ステータスがあるが、時代のくもりにて発揮されず。地上における彼自身なのだが、それには気がつかず、死後、天界では、太陽に召喚されるであろうとおもわれる



表のパラメータ

現在、芸能人 年齢？
九州出身
若き時より、持ち前の明るさで何とかする
各種の渋味と品位のある役柄は好評
いいところに住んでいる

裏のパラメータ

危機的な状況に、援護のエネルギーをおくるのを天命としているらしい

注意ステータス
妨害霊の取り付きで苦戦しているようである



表のパラメータ

現在、唯の会社員
神奈川県出身
普通の人である
ナチュラルな家を建てたいと思っている
年収 極めて安い

職業と、己の働きと自身の魂の導く歓喜と、一致して生涯を歩めればこれにこしたことはない。できることならば、人生はそうありたいものです。

人生は、己の抱くゆめもあるが、また、ひとつの学びのみちでもある。一つ学べば、次の己の道がみえてくる。

太陽は生涯の果てに、何になるのでしょうか。しかし、そんな答えは、多分、普段何気なく進むときにありはするものの、気がつかないだけなのでしょう。そして、そういう立場の仕事についたときに、その立場の面白さをしり、次のカタチへとつまれてゆくのではないのでしょうか。定かではありませんが、そんなような気がするのです。

ここに抱く、使命感というものは、金銭や名誉というものに、勝るものであるはずですが。しかし、それを現実には心のパラメータは、現実の前に飲まれてしまうものですし、それを照明してくれるような手筈は、人生にはありません。

ここに、現実に沈んでゆくのか、そうでないのか、どんな人にも試練としてあるのではないのでしょうか。結局、それを証明するためには戦うしかないのです。

また、その難関を突破できる意思や知恵があるかないかも現実的には、試されるものなのでしょう。

出る杭、打たれる。世界を正攻法に渡っていくのは、大変なことです。マルマルが良いのか、それで良いのか大いに悩むものです。

(注意 上記した霊は全くのデタラメであり、例である)

じゃんじゃん譲っていいところは、丸まっていいのですが、譲れないときはどつするのせよ。ほんどむずかしい。

心にある使命を無視する世の社会
まこと悲しき世の流れよ

西と東について

空中の宇宙で、どのように方向が定まったのだろう。すべてはフォームと順番と状態、時間の変化が重要だったと思う。突然漠然と始まった宇宙ではなく、家族があり、誕生があったように自然にそれははじまった。夜明けの前にも、世界はあったように、時間が無くても状態の変化が時間と同じ役目をしていて、理的に順序的に尊び、家族の愛のように、それはあり、時と共に、成長し、理性と日常的、のどかな田舎的にあり、それは変わらない理性と神知があり、そこには普遍的法則があった。この辺は定かでない。

宇宙というとコンガラガルが、こうして考えれば夫婦の生活も、夜の睡眠も宇宙なのであり、小さな所から始まる世界も良く分かる。また、足元を支える倫理は、遙かに続き、驚くほど大勢のものがいる宇宙もまた、ベースがある。原理的には、自然界、地球とながれる方位は確定していると思う。

さて、はなしは現実にかえり、今の日本をみてみると、屋久島の気は、桜島で桜する。九州はその胞だ。それで足があり、母音ウであると思う。関西近畿は西にある。西というのは、神のもの、逆の遣り方で、エになるのではと推測する。人でいうと下半身だ。西を太陽とする、東は月だ。東は比較的精神的なものがある。四国は母音オと思われる。矛か、否かは考え中である。北海道は頭だ。イだと思う。透明な魂のアイヌや、大神ではなかった。狼もいた。

銀河の形が、科学者は、棒状銀河とかいっている。此れが正しいと、陰陽の原理とか、棒を振り回すやつが多いとか、言い訳はつきそうだ。

極めて大雑把なのだが、位置はある。身体の機能に相応する土地と文化の違いは、こういった訳であり、本来、土地相応の神祭をして義なのだ。

カタチある理を守ってこそこの命かな
違いを認める理こそ神なり

和の倫理

日本的はなしがある。いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむついるのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす。

というわけで、山をこえるのか、田になるのか、歌があるとおもつ。この辺の神の名前と音と土地と役割をつつとつ、やはり理なのだ。あんまりカンカンな歌をつたつと収集不能になり困ることになる。

これからは、やはり、夫婦愛が原則であろうと思う。日常とて、小さな宇宙、シンプルが良いやつですね。

いろ多し歌のよまれる春の世も

冬の時は冬の則じつ

倫理と統治について

倫理はあるカタチと原理と調和のとれた生きたシステムとなる。神は、倫理の結晶であり、理は神であり、その理は理科のそれとは次元の違う理ものであると思います。

地球という、美しい環境をつくった理があるはずで、大きな命の歌でありまじょう。

歴史の中に顕れる、王や君主は、その者がもつ魂から動きをなしたことだろう。その動きが時代の求める理となれば、共感するものがあらわれ、やがて国となる。

倫理には、方向がある神的倫理のものは、多くのものに承認され、それは、その人物の意志が大きな規模の人を造った姿として社会としてあらわれる。

過去、王の意志は社会の動きの理となり、国となる。いろんな王の真理が、魂があるつ、国があるつ。また、善良な王ばかりではない。病気の理法を纏った王もいれば、国家を滅びにやる王もいよう。並みのことでは、国は起きない。先人の武將とて、一台目は大抵苦労の連続だ。貧乏の極みからかもしれない。だからこそ、民には恵みがある。以降はドウシテも贅沢な原理が、初めからあるという環境にのまれてしまう。

むかしは、戦争をやった。それでも一番上にいくには、様々な要素を必要とした。その原理は、ある意味で神的要素を秘めていないと、やはりむずかしかった。

現在は、民主主義国家で、結局のところ、統制や意見、国家としての意志が不明瞭であり、混沌としている。たしかに、総理になるのにも、学問や人格が無論問われる。その点昔と同じといえば、そうなのだが、問題は、その性質にある。経済を優先する人物を掲げている場合が多く、明瞭な心の持ち主でも、例えば本人は、神社に行きたいと思っても、叩かれてしまう訳だ。

現在は、民主主義という理で多数決という理を採用してはいる。これは統治不能な方向性であって、カオス、混沌の方位なのだと思う。

自然も宇宙も、理がある。地球の回転も、星の運行も、厳密な決まりがある。それなのに人だけが、混沌を採用したら、危ういにきまっている。甘さだけ自由貿易、自由金融、そんなことはありっこないのだ、それは、只の精神的、怠惰の結果あたりまえになっただけで、本筋から外れている。

物が増え、金で動く世界は多数決の原理なのであり、身体の一つの意識で統治された生きた調和のとれた神的世界ではなく、無論理に物が増える。どうしようも無い低次元の原理なのです。結果的の自然という、神の理の母体が破壊してしまうのです。

本来、会社は国家に大きく制御されるもので、国家の意思で動くものであり、例えば、危険な、不要な開発など中止の勧告で従わなければならないのです。神は限度やバランス、こういった見えない思いで感覚的に知っているわけです。

リサイクル、環境重視などといって、外面的宣伝では、いいことを言うものの出来る訳がないのです。

多数決、自由主義などでは、バラバラに決まっているのです。そういう原理を採用しているのですから。

計画経済、共産的ものも間違っているのです。方向を決定する理において、自然や地球の理にあうとは限らないのです。例えば、その木は神の霊が宿る大切な木だとか。その山に登ることは許されないなど、こういうこうとを命じる神がいるとすれば、何らかの判断があり、また神的決定と次元の違う自由からいっていることもあるのです。

自由も共産も、外国の単独論にすぎないのです。しかし神的を敢えていえば、共産的力がたりないです。中国は、詩や漢文ができれば、政治になるなんてバカにした政治家がいましたが。神的方位に措いては、東のア、天にあり、その天の勾玉、神が、日本なのです。流れ的には、平仮名の歌で、政治をこなしても、不思議はないのです。こういうことは、学者から発した赤ではわからないのです。

例えば、島の神がいるとしましょう。その島は、その神の大きな肉体だったとすれば、その神が人間の姿で社会で活動していたとします。その人、本人の発言は、本人の決議という自由性が裏に存在するからなのです。

(とはいえ、実際には、隣にいる隣接した倫理の人も神なので、討議となり、正しい方向が、正しい方向の導きに、長老などにきき正解に準じた方向に決議が起こるのです)

現在は、人の世界の政治、統治が余りに、このような理由で正解にかけ離れているのです。

仮に、日本や地球の国家の礎の神が命じたら、義の意思に従うが、社会であり、人民であるのです。

例えば、工業、商業でも、倫理的意思にたてば、制限しなければならない物が多数ありましよう。ゴミをなくし、川を蘇らせるには、何らかの理法、ヤリカタを選択しなければならぬでしょう。民主主義では、これは不可能です。

政治や会社の暴走を止めるには、つまり、国家としての理念、つまり心の変化が必要です。

新しい倫理を掴み、その意を国家意思にすれば、政治理念にすれば体である社会の方向を変えていくのです。

言葉にて心も変わり国蘇る

金融機関の暴走について

そもそも、日本は戦争後、今風に言うと、アメリカに洗脳されきっているのである。国の心がといたところで、働き盛り世代、及びアメリカにコテンパンにやられた世代はすっかり、アメリカのやりかた云々、大国の云々、伝統と格式のある…の外国至上主義となった。かくして、50年来の再生の道が決まったのであり、そのときから、日本のOSは入れ替わったのであり、一千年のからの神道的概念は、粉微塵になつた。もっと古いときたりや、迷信とかした言い伝え、などなど、もの見事になくなつてしまつたのであります（やむを得ない道ともいえますが……）。

そして、会社を中心とした現代風の主義が、今振り返れば、彼らの（外国）意識であつたのは結果であり、現実の証しだと思ひます。

アメリカ及び占領軍に注ぎ込まれた意識、言葉、文章には、つまり、その法の中に、結果としての公式があるのです。それは、判つてしまえば簡単明瞭なものなのです。

現代的社会は、多くの人が日常とつて過ごすやり方が正しいとされる。今風を構成しているだけなのである。

はたして、元の日本にあつた過去の考えが、例えるならば、地球、創世的、自然界と生きた繋がりとつた根源的、法に対し、あつていとは限らないのであります。

結果、60年、都市やビルは栗林した。しかし、失つたものが余りにも大きいのです。

すべての物は、労働力をもって価値を生み、金銭になればよい、外国の考えは、この程度なのであり、現代の正しい理念もソウタといつていいのであります。この考えは、自然界にあるものは、無価値なものとして、意味のないものを、取り上げて作つてやつていふという概念があり、漠然とした自然という言葉にあまえて、その本質や自然というもの、理法的定義を求め、困難さの為、意味のないものとして扱つたといふ概念があるのです。

私が思うに、つまり、レベル不足、理解困難なために、曖昧もしくは、思考不能であつたのが実際なのです。

その法の果て、つまり、金、物の利己の生活物資の獲得が第一のものとなり、自然いうものは、無意味な消費対象にしか写らなくなつてしまつたのであります。

大きさに、騙されるから、分からなくなるのであり、意味のない喧嘩をするから負けるのであります。外国の国どうしの会議、ジュネーブ130カ国の決議なんていうと、ハッハーとかつて、頭をさげているから、だめなのです。神のない、法抜け日本にムカツテ、ガンバレとエールを送りたいのであります。

これも 端から観察すると、また、理論値で面白いのであります。世界を動かしているのは、多数であります。

金銭の理で、ヤリアツタカラ、外国には勝てないのであり、骨格としての、意識は金銭的理にはないのです。火力の争いも同じです。車と綱引きをして、どっちが勝つ。このバカな争い、いつまでも気が付かないのと同じであり、意味がないのです。

神的には、日本一に対し、世界130ヶ国、日本を除く全部で、1なのであり、大国アメリカと北海道、取り違い、ヨーロッパが関西だと気が付かないところに理の流れの間違いがあるのです。

こんな具合だから、儲かりゃヨロシイという原理が、どの程度のものであるかは、明白なの

です。

金融、証券、一時に、何億動いた、なんてにぎわせて、大手を振っていられるのも、結局、定められた時がくるまでのものです。

月の理があつて誠の日本なり

学業的

学校の基礎教育の充実は、高等教育においては、ほぼ完了なレベルであると思う。日本では、高等学校教育、高専、専門、更には、大学、大学院にいたる学業的道筋がある。

これらの教育の充実が戦後の世紀の発展へと導いた原動力になったのはいうまでもない。

民主主義国家においては、民間の活力としての学業資質と会社における個々の経済活動の連携において、国家的物資という点においては、相乗的にその右上がりの発展をとげた。しかし、この論法では、いつか破綻がきてしまうのである。

これらは、前提条件として自然資質からの逸脱と宇宙的資源への拡大という人の世界の無限性というところに、大きな妄想を含んでいるためなのである。

戦前の国家的な宗教思想には、自然界にある現象には、神、霊の力が介在し、その一つの表現として人に宿る神があり、その子孫は皇室や王や豪族などのものが比較的關係が深いと。

この思想のなかには、自然界にあるものを、つまり無機物もふくめ、それに意味をみとめ、心としての存在の義をみていたのである。

この公式からは所謂、宇宙戦艦的漫画などに代表するスペースコロニー計画的なものは、意味が無いという公式にあるのである。多くのものは、学術的火が人間の製作物とともに、宇宙に拡大すると思ひ込むが、これは誤りといつていい。地球という宇宙船をみないで、模型を制作してよろこんでいると同じなのであって、上手くいかない他要素や裏の原理を根本的に無視しているのである。

こんなわけで、生きているリアリティの欠いた幻想的世界は誕生したのだが、この治療には、国家ぐるみの思想的理解がないと出来ないしかし、現実には、思想観念に賛否両論がある。また、完全な理論的真理であるといつても、時代の空気の中で実行できるとは限らない。そこで、現実を直視して対策をたてるのが効果的だ。

現実的問題として、今の学校の教育では働くための意味を掴むためのタイムラグが大きすぎる。実質労働としての国家の目標をつくり、食べていくことの本質を学ぶことが大切だと思う。

とくに農業的生産に関するものは、力をいれるべきであり。今の学校教育で行うべき実習では無いに等しい。要でもない教育をへらして、こういうことをすべきである。利己の企業的作品にのみ価値と、経済の勾玉としての意味を、一方的に賞賛してしまったミスは大きなダメージになつてしまふのだ。大地にあり、その生きた恵を天地とともに育てて頂くという基本サイクルを無視したから、中を飛んでしまふのであり、むしろ、レベルダウンしているのに、気が

つかないのだ。

また、リサイクルなどに関する教育も大いに必要である。しかし、これを他国のように装置と順路をつくって、法的のものでお終いという手ぬるさでは、どうにならない。まず、上のものが、根本的に国家とはなんであり、国家としての意思と政治をなぜ貫くことができないう世界になってしまったか、この精神論の怠惰することなく、探求できて、はじめて病は回復し、世界は調和をとりもどすものと思われる。簡単にいうと、大人が改心しないと駄目だ、ということであり、100歩譲って経済という言葉をつつしめ、こうするんだと会社に言えるようになってほしいのです。

父と子と共にならった社会には和というものがありません

人類と核

戦闘の歴史はつづいた遙か依然より、それはある。生物の進化とは、そのなかの繰り返しのよってあったように見える。

しかし、ものごとの生というものを定義するとき、科学や学問では生物としての視点から、つまり単一の物ごとの研究からしか見ていない。

これでは、全く死んだとおなじ研究になることを注意したい。この点においてインデアンや先住民は、古老なのだ。

日本でも戦後、西洋原理にかぶれるまでは、神は自然物にも大地にも、陰陽の概念にもあった。それがやがて、人格化して地上の人の体に宿り、世界を築いていった。また、生物、人物の死後の世界、つまり霊と呼ばれる世界のこと、明確であり、生物的死はこの世で動くために纏った姿であり、死後、大地や雲に、あるいは月に太陽といった根元的カタチに召喚する。つまり、死というのは全く違った概念だった。

現実の環境と狭い研究のみのものは、大抵は、このことに気がつかない。例えば、人口の脳をスーパーコンピュータでつくってゆけば、トンでもない人間の思考の億兆倍の凄い働きが可能だと。クローンにしても、大抵、狭い範囲での一番をとったと、確信し、ものを進めるが、その思考には全く至らない馬鹿さがあるのだ。

考えというものは生活自体が、思考であり、そのベースは、自然界は、ゆうにおよばず、木や石、生命のまへの溶岩、地球、月、太陽、それらは、我々が勝手に死んでいるという概念で、仮定しているだけであって、山も川も生きている。すべてのものは、意味があり、例えば生命のない地球でも、生きているといえるのだ。

石一つとってみても、勾玉や、宝石なんてものがある。その純粋な結晶は、岩石時代なりの神の意識の結晶なのであり、それを現代に神が人間としてあらわれ、己自身の過去の完全な意思を付けて、お守り、意識の基とみる発想があっても、可笑しくはないのだ。むしろそのカタチや美の姿を見ることで、自分の意識が遙か過去、完全性とロックし、大地のように安定した、

精神を戻すことができる。てっとり速いのは、自然や星をみるなんていうのもあるし、究極的には、自給自足というのもある。

単体で個に、生物であるという未熟な発想は、結局は、麻薬をうつっているのと等しい原理になり、結果として、自爆にしかならないようなものが、混沌と発生してしまう訳だ。

そういう考えの暴走の極が核兵器といえる。天然には、毒の要素もあり、眠らせとくものもある。それも、神ならば当然の理法で知っているのだ。

思考は、結局、周りの環境も、人々との関係も、全て総じてあり、地球にもあり霊にもあり、遙か銀河のカタチにもあり、心を静めて考えるならば、そういう意思に触れることも可能かもしれない。

世界の一般大勢における概念の進歩は、総合的には、レベルダウンなのであり、その概念は、永遠には程遠く、生命にすら危険をなげかけるものなのです。

霊的絶対値の古い長老は、基本的には質素である。自然との和をもつべきである高度文明の方位は、間違っている、心、魂の解釈が、あるはずなのですが……。

小さい生活でも、犬小屋でもよろしい。一つのを大切にすべし。今の日本が、捨て去ったものがあります。

もつべきものでないものは、其処らじゅうにあるのです。アフリカの原住民も毒となる草もヤバイものはしっているのです。

戦争、殺し合いにもルールがある。昔は、戦の前には、ヤーヤー我こそは、何とかと、名乗りをあげたものだ。核をもっていることは、つまり始めから、切腹したほうが良い。そういう毒も、因子にはあるのだから、地球のため、世界のためだ。眠らせなくてはならない。

それを考えると、日本にある国技など、カタの世界のルール、強さの上のものという、考えはヤッパリレベルが高い。もっとも一番強いのは、お百姓さんかもしれない。そんな国に心があるのです。

赤狩りについて

戦後、会社の活動が活発になり国は、開発と繁栄に向けてスタートした。

こうして会社の活動は、活発になっていった農業を捨てて、会社員となり、工業、電気、通信、機械などなど、ヨーロッパ、アメリカからやってきた文明は、日本に開いた。

論理的に心理的にいってしまえば、ヨーロッパ、西の方角、神的解釈の疎い土地柄での外の世界、つまり、カラのその歓喜に喜んでいたので。王家や神的な崇拜があった季節には、まだ繋がり存在する土壌であったが、それも、終わりをつける。機械や会社の種族は、経済の概念のなかでは、偽りの力と光を手にすることが可能である。

女性のホトの色彩の強いヨーロッパであって、更にカンカン族と黄泉の火の属は、大きな力を得ていった。それが、やがてアメリカで、ある土地に飛び火した。現アメリカ、世界の脳であり、火の位にあたり、そういう神の治めるところだった。

アメリカの民は先住インディアンであり、彼らは赤い民が多かった。ヨーロッパの属はアメリカ

力開拓にのりだすのだが、強い者勝ちの倫理は土地を回収し、これを我が物とした。

経済とその外面的大きさを手にいれたものは、まるで機械が人を侵略するように、ターミネーターと化す。これは、実は、人の世界のことではなく、自然界全般におこりうる現象なのであり、欲望に理性や夫婦愛が勝ってこそ倫理であり、神なのである。

先住民達も、また、知らぬうちに何か逆走や手抜きをしていたのだ。実はこれが、中々気が付かない。調和と円滑な永遠性というものは難しいものであり、簡単にはいかない。悪を悪とせず、改心させたり、生きたものとするのもまた、神のつとめであり、悪を殺せば善ばかりという神はまったくだめなのだ。

さて、戦後会社という、一段落ちた争いでもまた、赤狩りがおこった。共産や農業系の観念から離脱せよ、と国も会社も一丸となって、空中浮揚を目指した。彼らの狙いは天空からの支配、漫画の読みすぎか？ 高いビルを建てた。

この星は、確かに青い。ソ連の飛行士も、地球は青かったと、突きつけられたとき、ブルーになつたに違いない。

中々真実の赤に巡り会えない均衡のなかに、歓喜が存在するとなれば、どちらかに、偏つた世界は双方消滅する。今確かに、赤の勢力が必要なのだ。そういった意識の欠けてしまった政治は成り立たない。

赤といつても、トッテ付けたような人工的な赤を赤と拝してよいかというと、そうではないのである。個人的には、インデアンやチベットの様な赤を拝みたいのであり、機械的な赤は、好ましくない青にも赤にも、レベルがある。レベルの低いのは、赤も青も迷惑なものとなる。それが神の流れだ。

興味の対象から、外した思考の安定

俗世では、無数の書物やテレビのチャンネルで溢れている。これらをいちいち気に留めて処理し、理解していたら、疲れ切ってしまうだろう。

レベル的には、あらゆる情報を結集して判定すべきに見えることから、その力が問われる場合もたしかにある。

しかし、それは、絶対的な段階の卒業によるレベルアップからみると、無駄な作業であるともいえる。

つまり、田舎のオッサンが都会の情報に興味がないのと似ていて、ある真理を知って、自然の意識のなかに心をおけば、都会の誤謬にいちいち惑わされることはないわけであり、あー、バカなことやってるとくらの意識ですむのである。

しかし、昨今の情勢では国家が怪しき行為を意に介さなくなってしまったので、問題なのだ。だから、頭は悪いと見えても、つまり、その人の意思が高度なフォーム（生活）を持っているれば、外面的記憶や計算力は、他の人が下の方でそれを極めあっているものを使うことができる。

世で言う理知的人物とは眼鏡のエリートであり、それにあたる場合が多い。人物的に凝縮し

た何かあると思うものは、神的な働きフォームを持っている人であると思う。

おばちゃんなんか、何言っても通じないのは、そういうモードが無いのが大半だ。しかし、それが大衆的凡多なのか。マスターオブマスターなのか。きわどい場合がある。上に立つ君主はこれを理解していないと、良い世界は開けないのではと思う。

神が下支えをしていることは多い。歴史もそういうった人物達によって編まれたことも、また事実だといえるでしょう。

同じことをやっているものに思いついて

過去と同じことをしているということがあがるが、結論から言うと、同じという事は無いのである。

地球や太陽、月と諸惑星、ホシボシとの関係は周期則があり、その周期は波の波動のように周期や波、リズムがある。

結果に経緯を歩むものも、徐々に違ったこととなっていく訳だ。したがって、輪廻的思想があるが、そんなに単純なものではなく、単純ともいえなくもない。

過去の結末をそっくり歩むなんてことがあるが、その事例にこだわると、そうなることもある。意識を微妙に変化することで、そのループから脱すると、卒業があり、次の世界があるものと思う。

太陽の周りを回る軌道も、億万年の周期を余りかわらない。月も同じである。人の一生で、その変化を感じるのは、なきに等しいファクターであるが、以下、まったく同じかといえれば、そうではないのである。

やがて、太陽に寿命がくれば、所存の安定した太陽系の星々公式は、どこかにいってしまう訳だ。此処からも普遍に見えるなかでも着実に変化があり、途方もない時をみればそうなるだろうということが、見えるわけだから、同じように違ふのだ。

ちなみに、どこかにいってしまうといっても、また、誕生に関わる結果となるので、そんな事は思い結めることもない。今を軽やかに清々しく、天地とともに、生きるといったことが、大切であると思う。

表宇宙と裏宇宙

詩人や旅人がいる、ある音楽家の音楽を聴いて、自然を感じた。

銀河系は、2000億あまりの星の集まりだ。銀河といい、ミルキーウェイともいう天の川の正体が科学で最近解った。

神の神話も、ある神がなり、こころであり、この神の作用で云々となるが、どうなのだろう。

太陽や月、地球より微かにしか見えないそれは、遙かに大きいものだった。その圧倒する静けさは、影なる大きさをみせる。

王や君は時に、大きな世界をまかされる。どうなのだろう。

また、美しい銀河も誕生にいたる経緯があるはずで、全く無に等しい見えない存在が、根にちゃんといるのである。

神話は民には必要だが、大抵は一点に絞って終わる。最もな構成だ。しかし、何処かに根があるはずで、それに、気がつくのが難しい。

大規模をまとめるには、その方でもいい。しかし、その方が贅沢しか見なくなつたとき駄目だと思ふ。

学問の詩も文もなくても、何かがある人がいる。その何かの方向を見ていれば、世界は安定だと思ふ。銀河は美しい。しかし、それが浮く透明な深さは、限りなき無きものなのでは。

アイヌの古老の生活をみて、インデアンの長老の刻まれた顔をみて、間違つてはならぬ何かを思つた。

宗教的争いの無い方向について

今、現実には、仏教をはじめ、キリスト教など様々な宗教があります。これらの役割を無視することはできません。

神や聖者達の言葉は、皆、世のためを思い残したものです。

宗教的争いは、その本人達の意思ではなく、後の世の中で、あるいは時代や政治、人々の中で、形式的になり、或いは全く意思の異なる物となつてしまつた事が殆どでは、と思つたのです。

現状の日本の現実を見れば、和洋折衷的ないい加減な側面もありますが、やもえないものがありますし、それで半分は良いと思つたのです。

日本ならではの、柔軟な対応でよいと思つたのです。正月には、神社に行き、結婚式は教会の洋式で、葬儀はお寺でと真剣に考えると、いや、よその国から見れば、一体、日本はナンナノダと思つてに違いないのです。

日本から発し、外国に響き、再び日本に形として帰ってきて無難に纏まるとすれば、もっともだといえなくも無いのです。

日本は古道をもつてしても、争いにならない柔軟な対応性を持っていると、思つたのであります。

お寺や教会が、人々の心の救いの場として、あるのも良く、むしろそうあってほしいと思つたのです。

しかし、方向としては、古い国のやり方を見ていないと、上手くないのではと思つたのです。

人々の心を癒す則ことは、小さき源より流れ、やがて大河となる。救いの川や池など、様々な役割が考えられるから、日本風のそれで良いと思つたのです。

月の国の日本

旧暦、太陰暦である旧暦を、明治時代にあらためて太陽暦を採用した西洋の方針に準えた訳なのだが、これも、大きな意味をもっている。

日本は島国で小さい。世界は大きい。日本を中心とした、地図を見れば、中国の端の島国に過ぎない。しかし、世界を動かす本場の理は日本にある。

外国を太陽とすれば、日本は月だ。太陽は実際は、圧倒的に大きい。光っている。月は、地球の衛星に過ぎない小さな星だ。物質的には、太陽は、太陽系の中心だが、霊的には、月の役割は大きい。

月が無ければ、地球の自然環境といったものは、無いだろう。理は月から流れている。

太陽ばかりの世界は、駄目なのだ。月の理法によって成り立っている仕組みを無視する世界は、バランスを失った世界と言える。

日本が、そもそも日の丸を掲げるのも、逆への挑戦とも見える。日本の国と日本と呼ばれるのも、あくまで、闇の夜を光に変える理があっこそ、燦然と輝くのであって、付けられた火の原理を伸ばそうとする、逆の追求には限界がある。

外国の物を崇拜する落とし穴が、この辺にあるとおもつ。それは、輝いて見えるがよくよく、注意して消化して行かないと、現代風になるのだと思つ。

海からの勢力

人と石とは、よく波長の合う関係にある。海の揺りかこの中のでの生命の流れは、今もあると思つ。

特に、電気関係の集中する秋葉原などは、深海的要素があると思つ。原始の生命としての存在を感じるが、陸の環境を汚染しているのは、確かだと思つ。このへんが、難しい所なのではと思つ。

生命という動物は、動けるといふ素晴らしいさをもつが、石を間違った使い方をすれば、天使も、悪になってしまう。

あるときは、狼、あるときはアリ、あるときは鯨、あるときは木と、そして、石たち星たちと魂は、様々な経路をたどって、人の時代を迎えた。

熊に見える人物もいれば、ライオンの者もいる。コケのように暮らす者もいる。人が掘り出した宝石も、それに価値をみた魂が、人との繋がりだと思つ我々は、動ける喜びのあまり、過去の自分を忘れ、陸で暮らす人のための掟を、忘れてしまったのではと思つ。それを再確認し、ルールを造らねばならないと思つ。

答えは簡単であることについて

マダガスカルは、二つあった。原住民系と透明系だ。本当は、石は動かしてはならないものもある。透明系は、西の卵巣の辺りを確保しようとする。その国は流れやすい。もめごともあった。人の組織によって、氣質が当然あるように、当然、民の働きも違う。民同士理解がなければ、病気にもなる。まず大きすぎる火を小さくする。日本語を学ぶといいかもしれない。しかし順番からいくと、日本を立て直さねばならぬが。友は内にいる。

どれを選ぶか

地球は超大型ドザーとかをやったり、ドカンといけいけというのりがある。海から来た者はデンキ部品を売ったり、太陽はデパートに参加したり、つまるところ、理というのは男のものであることが多い。自然を守りたいと嘆くシーフをみた。だが彼は大型だ。自然の理法は月にある。月を女性とみたものは多い。その分逆立ちがつづく。世界を太陽とすれば、日本は月だ。静かな穏やかな世界。勾玉は純粹だ。武士と刀をふった時、既にその世界は女の世界なのだ。静思なる世界こそ、天空につうじる形人であるからには、動できる。動ばかりでは、魂を忘れる。時に人は天地創造の楽園を思う。その時、天の王星は月であった。

懐かしき、アリ

ゴミは資源としてある。

エネルギーは、余計な開発を中止し、太陽電池に絞り、生産から加工まで含めてゴミゼロを計算する。開発には、トップの者を結集し、原理的に無理ならば、畑に戻る覚悟も。

砂漠や荒野に施設をつくる。

同時に、緑をもどせれば、さらによく、また海水と水素と酸素の利用も考える。

また、コストは考えなくてよい。アリ労働でも、未来があれば嬉しいものだ。外国殿と手を結んで考えた方がよいだろう。

電球は便利だ。この一つも厳密に規格すべき。

玉のラジオの方が、渋くていいのでは。電気部品の一つも戻るようにするべし。

部品は全て戻る様にするべし。

電池も規格厳守だ。勿論、害の無き最善を尽くす。此れも国家のトップであたる。

ハガキは良い。放送はラジオの国家チャンネル。厳守厳選。¹²³⁴⁵ 誤謬情報は、最下のチャンネルへ。1は和歌や詩、国人の功労を報ずることを優先する。

車は小型にする。今の古をガサツに処分してはならない。部品ごとに細かく分ける資源化するしかない。トップの開発した電池や太陽電池の具合をみて、電気自動車を見極める。

ゴミはむしろ国家の資源化施設ができるまで、不用意にすてないほうがいい。

外国の緑も戻す。洗剤を作るのも天然のもの。緑を育ててから作る。

家は昔にもどるかな？これは、ゆっくりやろう。千年かかってもいい。

正月は松植えよ。祈り捧げよ。朝はウメ粥、陽を拝し、地下から這ってきた己を忘れずに。

注連縄、鳥居はいらない。大地に足をつけ、天を思い祈る。それでもよい。人々と会い、拝むもよい。此の方ぞという方を祈っても良い。

神に祈り、父に母に、祈り、伝えよう。言葉を。

親子の理解あってこそ良きであり違つ心の持ち方とて、やがて理解の道はひらける

敬うべし、父母の恩

言葉をかけ、語りあおう

古の時、親の背をみて、共に生きた

仕事に掛ける命は、共に学び行く

離れ過ぎた今こそ、共に戦い、敬い眠りゆくまで、愛しんだ頃を思おう

誠の心の只一つが、人生を超えた、溝を埋める

かたり

わかりあう

それが失意に終わるとも、

それでいい

それでいい

友よ

枯れる葉の一生でよいではないか
心はここにある

我々は澄んだ水をながそう
例えどんなことであらうと
変わりはない

深く静かな澄んだ意思是
友よ

あなたが魂に触れ心光る
懐かしい

何処にいても

進もうではないか、

また出会おう

その時まで

あなたの奏でる音は
かぎりなくやさしい
そしてかぎりなく悲しい
しかし、温もりを感じる
それにまちがない
それにまちがない
まちがない。

木に触れてみよう

裸足で、土にたつてみよう

石に座り、石とともに、心をしずめてみよう

川原で、水の流れを眺めよう

流れる雲をみて観よう

朝日の昇るとき

夕暮れの思い

満天の星空

静かなる月

明日への光

心

第二章

月の旅路に

地の底の蟻の岩根の太柱
誠の神の御あからなりけり

〔屋久島こそ、アリのような者らの出何処であり、誠神の聖地である〕

神の知の誠の則の道すじは
命の水になりにけり

〔神の知識、道徳に生命を守る道がある〕

澄みし夜に見ゆる誠の母姿
心ふさぐる都の息のりよ

〔都会の空気が澄んでいれば、母、天の川がみえたのに残念だ〕

めいかいに行きそこねし二十年ふたとせの
かいめいにて息をふくなり

〔冥王星、海王星の占星術に係わるまで〕

都を追われ逃げゆく人を笑いたる
この逆立ちも終わりなりけり

〔都会からドロップアウトする者を笑うが、都会はトイレ状態に気がついていない〕

国思う神の涙多けれど
めのかしましに心およはず

〔国を心配する神は多いけれど、女のヤカマシさに遠く及ばない現実〕

ウサギおい水にひたる神々は
厳いづの月をしらぬものなり

〔月といえば女のイメージだが、厳しい月を知らないものだ〕

国の息あずかり給いし神々よ
瑞かぎのごぶしに目覚めたまえ

〔国を任されている者いったい何をしてるかと、月の神の怒り〕

文明の火にうしないし神の火を
心にともし勇めまめびと

〔生命の火は心魂の火であり、便利を追求したための無謀な火とは違う〕

神かみことに息吹きかえせ
元つ神々

〔もともと人ばかりという考えがおかしい、地上にも生神がいる〕

たとえ百万つくすとも
理のあるひとえにまけにけり

〔百万語言葉を連ねても、理法のある紙一枚で終わりに〕

宝石を得たがる人の多けれど
吾文拒む諸のまめびと

〔石というものは法理をもつ。しかし、ホウセキが欲しいのに真理は避けたがるものだ〕

地に転び心を大地にあわせれば
吾文の意志
木杖とみゆれり

〔大地に寝転んで、その静けさを体得すれば、この文も杖程度のものでしかない〕

葉の青き大空うたう木々の間に
夢の礎ここに悟りし

もゆる日の燦然たるそのさまに
生命の力わき出にけり

輝きたりける神の愛
日のありがたき御姿をみゆ

静かなる夜の世界に身をおきし
静思なる知は陽にはたらく

〔月は実は太陽に働きかけている。月知は太陽おも動かす〕

太陽に愛の決りなかりせば
あまたの星の道におなじし

「太陽が長寿なもの、或意志の掟をまもっているからだ」

地につきし心しすめ思ふるは
我らが動のかしましをしる

「我々はなんと、ヤカマシク動いているのだらう」

月かげの中にありし法祝詞ほうしゅご
世の輝きを守る心こころ

「月の神の法は世の生命ともいふべき重大なものである」

民おさめ始めてなるる生命いのちかな
言葉ことばかけぬ愛のたらずや

「国家は民と共にあり、誠の者が指揮をとって初めて生命となる」

民迷い心の扉とぞされし
誠たらずと心よりくゆ

「地上の神が活動をしないため、民は心を閉ざしてしまった」

暗闇やがて晴れりたるそのときは
魔の道のもの光あふれん

「魔道の者も、実は神の理法があれ改心し助かるといふこと」

民の世の暗きに逃げて吾心

民ともどもに船にすすまん

〔自由主義で50年の間に国が暗闇になってしまった〕

むなとせ
六十年に吹き込まれし言霊を
我切りたる神々よたて

〔アメリカの法などあったものではない〕

民おさめ導きたまう所にて
いのち
生命うまるるきずけ神々

〔高みの見物はどうなのかな…〕

むく
無垢なるところは天空の
てんくう
考えられじ大きさよ
とわ
永久の命のそこにあるらん

〔大銀河の心〕

たいしや
岩山の体主にかたぶく神々の
いくまひり
戦政にあたまかかえん

〔地球の魂は体に進み、現在の政治のようになってしまった〕

みたま
清き志の無垢なる身魂あるならば
その誠にまよつものなし

〔年老いても無垢なる魂を感じる方ならば、ついていってもいいかも〕

くもりきりたる吾身魂
都のノリコトに長くめざめん

〔都会のやり方が当たり前と思っていたが、気がつけばなんと困ったことか〕

瓦礫野を一人あるきし思ふるは
民ありがたし神の御恵み

〔民の多さに驚くが、瓦礫野に一人では助け合い人である〕

地の上をあしであるく国びとの
目の澄めることいとぞ清じき

〔チベット、インディアン原住民大地とともに歩む者たちの心〕

静かなる山よりふきゆる波風に
こころ洗われめをつぶりゆく

世の中のカビやムシも役目より
ありて地はまわるなり

〔闇商売やヤカラととっても良い…〕

山里にいりゆきたりて一人にて
ただ木になりて光をあびむ

鳥たちの歌う声にききいりて

そは山恋ゆる歌ときこえり

空気のなかに香りたる
山の香りの笑みもらい
ほほえみ返す我ぞたのしき

やまのせを流るる雲をみゆるれば
時のゆるりていとぞ樂しき

風ながれ
雲かわり
木のささやき
草ゆれり
ふところに帰りて時のたちたると
いとおかしきつこきみゆれり

岩山の地の魂の世の政まつり
国の政のガンセキのこと

地の玉は体主にかたぶく玉なれば
世の大型やヤマタのごとし

「地球はトラック的所があり悪気はないのだが…、なのだ」

月玉は瑞と思えど巖瑞に
変化自在の誠なりけり

日の玉は敵のみたまと輝きて
敵しきいさおを世にひきゆく

瑞月ついでづの敵の則におどろきて
溶岩とげんめざめるアリの軍隊

〔月の敵しい指摘にあって、ガンセキ軍団はアリに戻る〕

地の玉は瑞のやりかたおしすすめ
吾にきがつかじ待ちし自然を

〔開発経済、これでは自己破壊でありガンになる〕

月をさささる靈線れいせんは
天の川の御姿か

月の御靈の無垢なれば
変化自在に道をしめさん

天空なりし影人に
支えられし世の中の
その勲にきすくすへなし

〔本当に大きい人物はまったく影にいらるといふこと〕

時になりしは敵敵ていと身をひるがえし世の舵を
変えさせたまうぞかしこけれ

〔月は瑞から敵の敵と身替り世の舵を直すこと〕

高天たかあまのの整然なりたる清き都は
木々の歌う御園になりけり

神かみの威いは靈理れいりにありてまつり」と
靈意れいい深淵しんえん尊たうんき御言葉

「神は金錢で動く政治はせず、裏の精神までみとおしてまの言いつのどけへんきまものだ
と」

瞬またたきひまの六十年に
病になりし御船をば
千年せかけて民共に
輝く御舟にのらせ給え

「日本のこと」

生き生きて生きてはじける人々は
神かみの大路おほしを見ゆる御民よ

「光の階段を登りだせば生き生きとしてくる」

癒ゆる地の思いの中に人々は
晴れる心の眩しきをしる

「大地が癒えるような仕事なら心が晴れるよ」

世に悔いゆ嘆く心もまた逆に
窮地きうちにあいてありがたきをしる

「変わってしまった世の中で、嘆かわしいが窮地ではありがたい物もおおい」

意味のある働きありて国民は
始めて心の輝くをしる

〔自然と人、神、一体となって初めて光をみるだろう〕

迫害したる天使より
涙の愛をさずかりて
我蘇がえりてこの文かかん

世の中の人においてこの重さ
世を救う難しさに死す

良き靈の同志の支えにあいながら
我忌むべき言葉をかけにけり

我倒れ心の鼓動とまるとき
なける天使に救われにけり

未到なる高き山にははまれて
我眠りにつかんとする

この文の羽ばたくその日を夢にして
上りたる山々の嶺

精神の虜になりてすすみたる
科学も馬鹿にするはおるかゆ

〔科学を馬鹿にした精神論では上手くゆかないだろっ〕

科学医師もありがたし
危うきかりける難局には

〔科学医師も神のまっごころにや〕

心同じし神々と争いたる悲しさよ
涙の誠で一つにならむ

曲^{まが}が神とあやしき憑^{ひょう}依^いになやまされり
されど心根神の御国へ

我^がの強き神の集まりつとえれど
ボロボロのはてみる誠よ

涙みて誠のありが悟なり
一つに結ぶ生命もゆれり

魔の神も泣き応援す
地の生命

只涙死せる淵のそのときに
神の涙にすくわれにけり

魔の窟ももつたいなき心ちして
ありがたし世人よびとこの勲いさな

心はゆ魔にも鬼にもなりぬれど
最後の時に一つとなるらむ

死せる勲をことごとく
生きるに変える神の道

「今のやり方は自爆してしまう神の道は、これを生きるに変えるのが大切なところだ」

人々の地のにじみたる働きに
ありがたきの心わすれじ

天冥海の難局に文明物を駆し使
いかでこころるかこの難関

「今の時代、難関をこえるにはコタワリを捨てなければならないのではと思っ」

有り難し文明ありてなるからは
この働きを無視することなし

「文明批判では解決の道はない」

都風ゆるりゆるりと木々歌う
町並みそろえ日本に帰りし

人民のその勲をほめたたえ
生きるにたわめ諸の神人

我おちし再び立ちぬるそのおりは
吾はかならずや其処につなぎゆ

やすきにて命の綱をつなげしし
その規格を授けたまわれ

〔管理と銀行中心ではなく、町商売的なものと道德の両点をもつ法を〕

生きた仕事につかえたる
御たみの歎喜夢にみて勝鬨あげたる国おもふ

木々あおぎ天の神威のしろしめす輝きわたる御国にて
吾は小さき手業売りゆく

敗戦の上敗戦の火の争いから身をひきて
言靈戦の靈力に見事な御国を燦然と
世界の国に示させたまえ

〔戦争や経済といった火力の争いをやめ、神意からの行動で国は勝利できぬ〕

山野を駈ける人々のその行いの智のなるば
則戒めの思いふかきに

〔アイヌ的生き方の農村などは税金なしてまよ〕

野にも都にも風そよぎ人々の意志硬くるば
おかしき苦宝ゆるし賜れ

〔道德や神の道が確立したなら、少々のロッカーもやむをえないだろう〕

神靈の宿りたるその土地は
神のやどに同じくし
義のありたる礼をするらむ

〔山や特別な土地は大切にせよ〕

花香りてふ舞う今日その風は
君の則の心より咲く

〔月の国のやり方〕

逃げにしも引けぬ命ありぬれば
幾多の挑みくゆることなし

現世うつしよの木の葉のごとき時ながれ
永久をしりても使命に燃ゆれり

〔現世での一生は限られたものだ。例え永遠をしても大使命が生命だ〕

神道かむぢの目指す所に山々と挫折の道のおおけれど
いのりと仲間の涙にて癒ゆる心の輝きを
世の人々とあいともに
すがすがしき祝典を涙で向かう時こよと
願ひ夢見奉る

第三章

癒へゆく夢へ

1111するべきである法案

(あくまで例文であることを留意されたし)

あくまでこれは大まかなアイデアであります。環境問題をなんとかしたいという気持ちから、実は、私の追求は始まったのです。それは、結局、根本は何なんだということを探求し大変な作業になってしまったのです。そして、現実的なプランとして(とても現実的とはいえないが……)大まかに考えてみました。

国家は万世一系の天皇に統治をす

天皇陛下に国家をお返しするとともに、最高位殊勲でその権限をお守りするあとの散らかしっぱなしの社会は神々が何とかする。政治と実指揮官という形になるかもしれないが、何かの際はお言葉を仰ぐこと。

問題は、過去の武家のように隠れた力を如何に暴れないようにするかであり、倫理的な解決をするかだ(隠れ御になったような神もいるからだ)。

累進課税の復活(神、程々に儲かり、暴利むさぶるべからず)

年収7500万円以上高額は、全てカット。この位厳しくしてよい。神は菜食にして慎ましくしないと社会全体が濁るからだ。スポーツも霊的勲であってほしい。

環境重負荷資質税の設定

環境に、重いものには過度の税金をかける。多少オーバーなくらいでよい。大体、ものは苦労して作るから愛しく、投げ捨てがなくなる。一品良いものを長く。

国家に利益のためでなく、多に貢献したものに各種特権を授与する。つまり、精神的権利である。電気はただとか、電車はただ。税制免除とかのもの、中から上の特殊な特権は極めて得るのが難しいほうがいい。誰にもあっては意味ないのだ。

功勞者三級、各方面 予備特權（電車ただ、とか。本人のみ）

まあ、細かいのは色々あるだろう

国家神威主勲（税制免除、土地支給、三世代持續權威更新も可能）
（余程のことでないと思われぬ。100年に一人、など天皇陛下レベル。万一に權威交代があつてもこれなら昔の様なドタバタを防げるだろう）

特殊權利は、體的、技巧的、知的ものもあり、さらに、靈的、神的な意義のものまで設定があつてよい。何故ならば、それは本来有るべき裏のメーターで有るからであつて、但し、最低條件、現実的活躍によつて証明される特權である。動、知、神的、よほど見事なものでなくてはならないし、條件たるべき者でなくてはならない。つまり、金銭的受賞でなく、靈的執行權の授与において世での保証であり、最も重要な權威は世代間での威を証する。

屋久島、禁歩区域の拡大

屋久島は、神の島であり、木を切ることすら許認可でなければならぬ。島のゴミ等も細心の注意を促すものでなければならぬ。觀光範圍も厳守限定とする。森に入るのも限定の人だけだ。

ここが汚れると、世界的影響のある場所であり、立ち入るべからずの地帯だ。島というものは、馬鹿にされがちだ。都会のゴミを運んだ、とんでもないのがあるが、困つたもの。

島々は、場合によっては、本島からの大幅援助も必要だと思ふ。島は先祖の場合がある。

霊山などの入山禁止

富士山などあんなに何千人ものひとが登つていい山ではない。山や自然にも、神あり。帰るところがある。

登山を認めるにしても、年間50人位にして、特權階級15人、人民、抽選によつて35人とか決めたほうがよい。

山岳地帯の開発も同様であるし、山々は、不用意に汚してはならない。

こういう法は、現代では絶対通らないし、法案定義するものもないだろう。靈的意味を悟つた法こそ、真にストレスをはらしてくれるわけだ。商人は、觀光業者と政治家は来るが、それでは国家としての面目はないわけだ。そのへんが難しい。

河川の乱開発禁止

ダムが結構ある。砂防壁や諸々も、さらなる工夫と改良がある。結局は、ダムは大きく環境を損なうが、なんとかならないだろうか。必要性が大きいため必要だが、これ以上は、川は川でありたい。

ダムの解体は夢である。これを実現するには、無公害でしかも環境損失無しで太陽電池のループシステムを組まなければならない。貯水形式も小型のものを目立たなく埋設するようにして川は川でありたい。

河川の水質法

川の水を澄ませたいのは、せつなる願いである。川は自然の血液である。これも大変な知恵と作業だろう。

山岳地帯の国家规定洗剤及び尿処理規格設定

山岳地帯は国営でつくった指定の洗剤以外使用禁止として、尿尿も土に戻す処理を規格を国家できめて行う。

悲しいが、便利の合成製品は山奥の水にすら泡をたてる。国家は外国の土地で、植物性の洗剤となろう植物の栽培から、その配布にいたるものを管理しなければならない。植物性の自然帰還率の高いものでも、善い洗剤をつくれる。こつこつものは、多少不便でも強制すること(国や自然、また子供たちのためと思えばなんてことはない。シンプルでいい。挑戦すればいいものもできてくる)。

男のやり方とは、ここで洗剤メーカーに頭を下げてワイロをもらうものではないのだ。精神論とはこうありたい。

尿尿も浄化槽ではだめだと思う。土に戻す作業システムを、国家が管理すること。汚い仕事は避け民間に。それでは駄目だ。

歯磨き粉。これも国の指定のものを使うこと。天然原料、天然油脂、ハツカ等でもいいものができる。

地方の町、市、県営、簡易市場の設置

大規模、使い捨て量産的資質のは戒法はやもえない。それでもやっていける一部の優良企業だけではない。社会からドロップしたときに自己利益獲得の必要な市場を、あるルールに従ったカタチで行う必要があると思う。製作時に環境を害するか、否かの審査。不正物品の流通をチエックした簡易市場を設けたい。

このような施設があれば、大きくない農産物農家の助け、及び、利己的経済資質物資の簡易

販売が可能になれば生命線が縛られることなく、つながりやすくなるであろう考慮がある。しかしながら、合成製品資質の高度機械加工商品は、審査規格を通すか、製造物、製造者管理基準のようなものに従ったシステムで、管理される必要がある。

市営の最低限の協同予備生活所、オニギリ、布団、人民服

(婚姻制度あり。年齢制限なし。但し、給与所得のあるものは税金大)

神もどこまでも落ちるものであり、こういう施設は有り難いし、あれば素晴らしい。考え様によつては、オニギリ、布団、人民服なんて、原始時代の酋長の家より有り難い。社会労働知識や、学ぶ施設や、簡易医療施設が用意できれば、いうことはない。ヒトツボ半の畳、壁、カーテンがしきりであり、トイレ共同、シャワーのみ。共同生活での仕事、身支度は決まりを作る。また、市の行う仕事にも参加できるものは参加する。また、飲酒、煙草は禁止。不適切な性関係等の指導に尊守しえないものは、退去していただくものとする。

都市、緑化法案

基本的には土地を、自由、お金で自由購買するというのは、幻想である。個人の権利をどのように温存し、整理するかが難しい。

都市は緑化されるべきである。森をつくるもいいが、農業としての生産を期待する。学校教育の場としても、複合的に考えたい。

大規模開発の縮小

高層ビルの都市は好ましくない。いらぬものが多いすぎる経済がという概念は、この際、捨てた方がよい。

50年で作ったもの。100年で10階までにして、500年で世界の緑化作業で手にした木材で路面電車、緑化都市、木造を主とする。

なにも進んだ世界が、サイバー電脳とは限らない。文明の2000年は人類史にとっても瞬間であり、ツツパリ、あるいは病気かも、一万年以上、棒切で格闘していたわけだから。

交通について

マイカーの自動車の世界だから、現代があるのだ。何れ資源は尽きる。この選択は難儀だが、選択の余地がない。

もともと貴族の持ち物、自動車会社の創設者は、過去、裕福なもののみが、乗れるだろうと昔は思っただらう。しかし、それは大きく外れ、結果は、現代をみればあきらかだ。科学者や

研究者は、総合的予測では原住民におとらしい。選択の余地は無い。このまま、放り出して、億単位の車がのこる。

神の中には、文明的なものは放棄すべきというが、それは、つまり多数の中ではきかない。ほっとけば資源がなくなるが、汚染は激しい。つまり、ある意味でダメモトだ。

やもえず、考えたのはプランは、国家として太陽電池、バッテリーの完全リサイクル管理規格を厳密に設け、大予算でその開発を行う。バッテリーは、今の車より汚染を引き起こす可能性が高い。従って、すべての管理を徹底する太陽電池のコストダウンとともに、車で開発した基準で家庭用電源のバッテリーも完全管理する。

今まで使った5000万の車を徹底的に資源化してマテリアルに戻す機関をつくる(アリから出直し)。

工場は勝手に誘致してはならず、国家の取り決めに従う。生産する車は、リサイクル厳守を確定した電気自動車とし、小型でよい。基本的には、資源は貯蓄リサイクル材料を使い、輸入資源を極力減らす。

車の行く末は、このくらいしか考えられないものがある。実現の困難さは凄い。人民が国の為、オニギリ、労働の覚悟が無いと、賈沢品全般は残せない。

電車について

車に夢見る前は電車だった。都会のゴチャゴチャは凄い。此処まできたら、ほおっておいても失敗に終わる。改革でも同じだ。ならば逃げずに挑戦したほうがよい。

木々ゆらく緑の芝生に、規則正しく路面電車等よいかもしれない。

企業の国営管理

産業廃棄物、処理施設の完全管理、及び汚染土壌の処理、装置開発促進

心のなんたるかの次の重大な課題である。産業全般に生じた物品は、完全に回収し、基礎材料に変換しなければならない。これは、最重要課題だ。汚染土の処理回収技術も確立しなければならない。自衛予算などを削減し、それにあてる。無論、会社には製品の回収を義務とする。これも、タダバタラキ覚悟の難業だが未来の国家のためと目標はある。もともと、アリから始まった。ヤッパリ其処に戻るのだ。

塗料一つ、鉛筆一本、電球ひとつ。厳密な規定が必要だ。アメリカをあとと言わせたいのなら、一丸となり、害のない規定を守り、下の道に戻ることだ。

自衛隊改良案

まず、現存兵器を使えるものは維持。老朽のものは、解体。作り替えるものは土木作業用に作り直す。

新兵器は必要悪として、環境基準を順守し、全て国産の技術で国内でつくる。数を減らし質でゆく。

やむなしの部分が多い。刀を使う訳ではないが、カタチとして居合道にあるとした方がよいだろう。

人民や軍人、技術者。そういうものは、ステイタスを求め、共に喜ぶ。今の法では、わがままは通らない。夢も無いだろう。それが、何かストレスとは思うまいか？

予算は、無論、削減。これはしかたない。今まで火を使いすぎたからだ。考えた方が限られた方が、善いものが出来る。

戦争なら、弓と刀の方がいい。それで、真剣勝負したほうが核兵器を使うより大人だ。戦うときは、「やあやあ、我こそは、」と互いに名乗り、死して怨む御霊無しと、誓いをたててからだ。

本当は農耕の道具があれば良いわけだ。そういう時代がよい。日本がかわれば世界が変わる。武装を捨ててもいいのだが、現実には難しいし、剣道、柔道、弓道、相撲。国技で鍛えてこそ、と思う。この道が正解だろう。

性的な姦淫

性的な姦淫は、認める方位にはない。中国的発想も必要。

学業的な教育

現代の教育では、社会に出てからの意識のギャップが激しすぎる。ましては、神的調和のなかでは必要物資は、おのずと手法、製造法も厳選されることになる。極めて高く学業を学ぶものは、自己の強い意志で学び求め、そうでないものは、社会制のなかで学び鍛えることを習得したほうがよい。

特別優遇法

アイヌや、インディアンのような自給自足を主要とする者たちからは税金などは免除する。

土地に線を引いて税金をとる役所的概念は、最高神のやり方とは全く異なるものであり、大きな規模のものなのだ。但し、これもその人が本当にそうなのか、また汚さぬ生活者などの審判は、役所が見てもよい。また、普通は神ほど質素を好む。一体、今の役場は、何を考えて仕事をしているのやら……。

本書に関する注意事項及び読者への後書き

本書の目的意識

人々が本来の軌道とはなんであったか、そして、願わくば善き道に帰還することを指標とする。

政治を動かそうとも、如何にもならない。その原因に応え、現代の誤れる意識の根本を浮き彫りにする。

元の貴族、元の神人に政治への権力復帰をうながすための治療薬。

自然界への帰還、地球的生命の維持のための大まかな人の道を示す。

カオス、混沌を回避するための理法を、投与する。しいては、善悪の在処の再確認。

いままで、いいのかなと思いつつ、流された意志復権。

解放しすぎた社会の回収、修正、修理に必要な治療法。

アイヌのような精神、インディアンのような者らの神性の高きことへの理解。

本書にかける意義、利用法

頭の良い人は、気が付くのだ。結局、政治の精神とすべきものは、何かと論じても、現代の政治論や経済論では答えはでない。哲学論を駆使しても何ら精神的カタチをもった法は得ないだろう。

歴史学や宗教的研究を経て、ようやく、苦い土台につく程度だ。そもそも、国家という精神とするものが金や企業の原理であるはずがない。

自然的なものを、漠然と人と対立するものと捕らえ、発展した現代的国家の意識は、実は諸宗教の中にあるプログラム、言葉が見えない効果を示している。本質に気がつく人は、希であると思う。

何故、人がいて自然があり、こういう根本原因に関する解を示す義の教義を考えずに、人の集団である国家の意志やカタチが定まるはずが無い。現代の社会では、その精神的観念を捨てて、かわりにお金万能という極めて粗悪な教義をセットして、社会を押し進めているに過ぎない。

本書に記されている内容は、その現代に誤れる定義を、それは、誤りの方向であるところと、ことに、意味がある。そこに、法とカタチを生じる。

つまるところ、反駁不能の真理に出くわした時に、そういう方向があると認識していただければ、ありがたい。

それに対する異論は、様々であるつつが、定義したことの価値を見出していただければ、幸いであり、以後の時間に与える意義は大きい。

真理は、時に衝撃があるものである。道が間違っていたときは、誰しも呆然とする。しかし、そればかりではない。逆に極めて高い論理や自信、安定、意思、威厳をそこに見出すことが可

能なばかりか、慣れてしまえば、なんてことはない、というものでもあるのだ。

絶大な利用法がある、と、欲や悪考を擡げるものもいよう。誤謬化の知恵を働かすものもあるだろう。そういう謀りをもつ者らに、騙されたくないように勉強したいものです。

現実の国家の規格をまもることについて

いくら現代の国家的批判があっても、現実の理法にあつた規格にあわせて生き方を模索し、考える知恵がなければならぬ。また、そうでないと神といえないだろう。

それは現実が、例えやりきれない環境であっても、その枠内でも、生き方を模索し、時を持つのは可能だからです。

いくら真理といつても、無理は禁物である。例えば、刀は武士の魂と、刀を振り回して、ちよんまげを結んでも、それは、そもそも、その前は平安や貴族に代表する世界もあり、また、その以前も世界はあり生きるための時代の理があつた。故に浅い考えで、行動するとズッコケルことになるのが、おちなのである。人の歴史ですら、検討もとれないほど深い。此れが、日本だと固まった知恵を出しても、現実にはウケルとはかぎらない。

確実なのは、しっかり現実を見て模索する方法であり、待つことも大切だ。やむを得ずを認識して、現実を一步步つ方向をみてゆっくりと待ち、耐えて最終的に闇が光りを認識すれば、光の階段へとゆくだろうと、ゆっくり思っている。

まちがった見解があることについて

本人は、確信する真理、時とともにさびれたり、間違いだつたりすることはあります。本誌の真理も確定的要素もあれば、棚上げした真理もあります。何年か後、修正を要することもあつてでしょう。そのところは、勘弁願いたいです。生活にどう活かし、すこしづつ変化させるか、その辺が重要です。

また、悪を殺せば、善というのも間違いです。改心のキツカケがあれば悪魔の天使になりうるのです。ですから、現実がどうなるという、そのへんは予測できません。例えば、新しい統治法が、開けるという可能性も悪資質も害することもなく、使えるようになるといったこともあるからなのです。

尚、心理的には、この書は、霊的の真理のものです。現実を生き抜くためには、まず動くを演演しなければならぬでしょう。何かに頼らねば突破出来ない項目もあるのです。人はそれを、師といえます。過去の人かも知れませんが、現実と戦う人々の中に、地に埋まる宝石のようにあるかもしれない……。

大きなベクトルのなかで

いろいろな矛盾がする項目もあるだろうし、難儀な、あるいは、漠然としすぎているところ

もある。しかし、大意に置けるベクトルがあつていれば、大体の方位は確保し、見えつると思ふ。

銀河が、右だが左だが、定義の方向があつても、一個一個の星や石の動きなど方位の方向が違つじやないかといわれても、把握できるわけが無いのと一緒であつて、そのへんが難しい。漠然とした形と方位せ認識してもらえたら、ありがたいです。

最後のバトンに

これを読んで賛否はあると思う。もし、気に入ったら、これはアイツに読ませるしかないと思つたら繋いで欲しい。

過去にユダヤ議定書というのがヨーロッパにあつたらしい。その内容は、かなり厄介なものだ。多くの賢者、知識人はそれで悩んでいるようだ。

ある意味で本誌の内容は、それを超えている部分もあると思う。私は日本人であることに、安心してほしいし、自信と確信をもってほしい。我々が知らずとも、銀河が億万年、静かにまわるように、確信という方向も何れ解り燦然と輝くはず……。

しかし、現実、戦後のやり方に引つ張られた分、辛いと思うがそれも成り行きのだといえはしかたないのだ。その辺は、時にまかせればよい？

霊界からの大予言

1999年5月21日発行

著者 (C) 古宮賢一

発行者 白戸修

発行所 株式会社 修文社

〒134-0088 東京都江戸川区西葛西5-5-7

TEL 03-5674-4791 FAX 03-5674-4767

LDZ04663@niftyserve.or.jp

<http://www.shubunsha.com>

本作は、パソコン通信及びインターネット上で配信されたオンライン出版物です。